



平成 27 年度  
学力向上外部検証委員会  
報告書

学力向上外部検証委員会  
平成 27 年 11 月

## 目 次

○ まえがき	
I 調査の実施状況	1
II 全国学力・学習状況調査からみた教科に関する長野県の成果と課題	2
1 平成 27 年度調査の結果と分析	2
(1) 小学校調査	
(2) 中学校調査	
2 過去 8 回（平成 19 年度～平成 27 年度）の調査結果の経年変化と分析	6
(1) 小学校調査	
(2) 中学校調査	
3 教科に関する調査結果からみた長野県の成果と課題	10
(1) 主として「知識」に関する問題の調査結果	
(2) 主として「活用」に関する問題の調査結果	
4 教科に関する長野県の成果と課題（まとめ）	22
III 県教育委員会の学力向上施策に対する評価	23
1 「平成 25・26 年度 全国学力・学習状況調査 長野県分析委員会」からの提言と 県教育委員会の対応	23
2 平成 26 年度の学力向上施策の評価	26
(1) 学力スパイラルアップ事業の現状・課題と改善の方向	
(2) 新たな家庭学習モデル創出事業の現状・課題と改善の方向	
(3) 学力向上にかかわる非常勤講師配置の取組の現状・課題と改善の方向	
(4) 「授業がもっとよくなる 3 観点」を基にした授業力向上の取組の現状・課題と改善の方向	
(5) 市町村教育委員会、保護者、地域との連携：学力向上に向けた取組の一層の推進	
3 事例：学力向上のための学校による取組	35
(1) 平成 26 年度学力向上にかかわる非常勤講師配置校の取組	
(2) 学力向上にかかわる特徴的な取組	
IV これからの時代に対応した学習指導	44
1 「子どもと共に創る授業」の実現に向けた具体的な支援の充実：質の高い深い学びの実現	44
2 総合的な学習の時間における、探究的な学びのさらなる充実を促す支援の促進	44
3 公立高等学校入学者選抜検査における思考力・判断力・表現力を評価する問題の さらなる充実	46
4 長野県の潜在的な力を生かした取組の一層の推進：地域との連携、学級づくり	46
(1) 地域との連携による学力向上について	
(2) 学級づくりを中核とした取組について	
V 外部検証委員会からの提言（総括）	50

# 「先」を「生」きる“はら-から”として

学力向上外部検証委員会委員長

宮崎 樹夫

長野県は「教育県」として全国に遍く知られています。それは子どもの力を【聖・[真・善・美]】に向けて伸ばし、その手段たる[健・富]を備えんとする峻烈な志<sup>1\*</sup>が明治以降の荒波や乱流に打ち砕かれることなく貫かれてきたからではないでしょうか。この高潔な気風は信州の教育界で今なお堅固に継承されています。故郷への弛まぬ想いからいつる教育の情熱・氣勢・完遂は歓天喜地の情を人々にもたらし、過ぎゆく幾年月のなかで、風土と化し清水の如く此の地に浸潤し、教育の花々を咲き誇らせているとさえ思い至ります。

信州から世界へと眼を転じてみますと、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を推進すべく、資質・能力の育成が様々な国・地域をあげて取り組まれています。我が国でも、体力や心力との調和を保ちつつ、資質・能力として育むべき学力を向上させるべく、既に次期学習指導要領の改訂が胎動しています。

こうした我が国及び世界の動向を踏まえるとともに、信州の脈々たる教育風土を最大限いかすために、本委員会では、県教育委員会による学力に関する取組を評価し今後の在るべき方向性について入念に検討致しました。特に、本年度は、昨年度までの「全国学力・学習状況調査長野県分析委員会」と同様に、調査結果に基づいて学習指導に関する成果と課題を明らかにすることに加え、県教委による学力向上施策（学力スパイラルアップ事業、家庭学習モデル創出事業、非常勤講師の加配、授業改善の3観点）について評価し、これからの時代に対応した学習指導を見据え、「子どもと共に創る授業」の実現、「総合的な学習の時間」の充実、公立高等学校入学者選抜検査の内容・方法等について協議し、本委員会としての提言を取り纏めました。

今後、長野県教育委員会におかれましては、本委員会による提言のみならず、高大接続など我が国の教育の動向を確実に捉え、信州の子ども達の学力を高めるための施策・取組を迅速かつ着実に講じられることを要請致します。さらに、『教育立県』を旨とする信州として、子ども達が「己が生」を全うできるよう、国の宝である教師の心身に十分配慮しつつ、学校・家庭・地域が一丸となって学力向上に対する不拔の奮励と不断の前進を切望致します。

『深雪（みゆき）せる野路（のじ）に 小きき沓（くつ）の跡（あと）  
われこそ先に行かましものを』（林芋村 先生）

---

<sup>1</sup> \* 小原國芳 先生『全人教育論』（「価値体系論」より）

# I 調査の実施状況

1 実施日 平成27年4月21日（火）

2 対象学年 小学校第6学年、特別支援学校小学部第6学年  
中学校第3学年、特別支援学校中学部第3学年

## 3 調査の内容

### (1) 教科に関する調査（国語、算数・数学、理科）

- ・主として「知識」に関する問題

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを中心とした出題

- ・主として「活用」に関する問題

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容を中心とした出題

### (2) 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

## 4 平成27年4月21日（火）に調査を実施した学校・児童生徒数

### 【小学校調査】

	実施学校数	児童数
全国（公立学校）	20,005校	1,061,301人
長野県（公立学校）	367校	18,553人

### 【中学校調査】

	実施学校数	生徒数
全国（公立学校）	9,691校	1,016,737人
長野県（公立学校）	191校	18,550人

※ 実施日に実施できなかった小学校1校を除く。

※ 調査を実施した児童生徒数は、回収された解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出。

## Ⅱ 全国学力・学習状況調査からみた教科に関する長野県の成果と課題

### 1 平成27年度調査の結果と分析

#### (1) 小学校調査

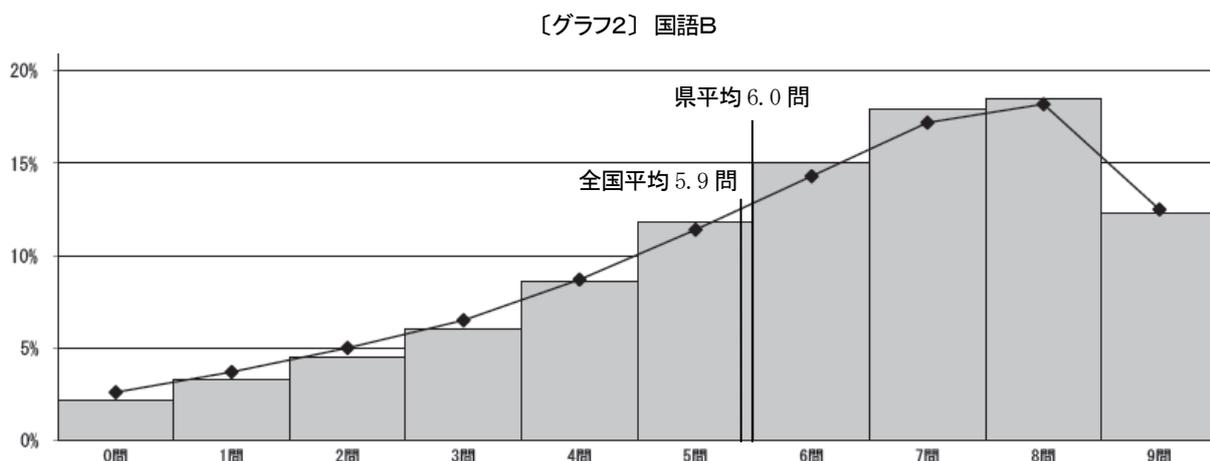
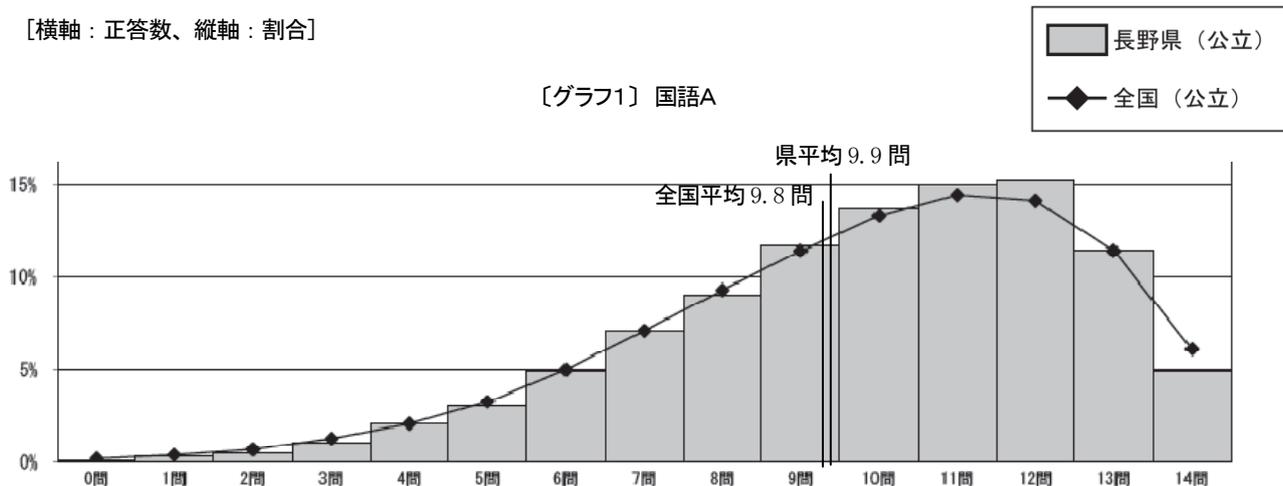
##### ① 結果

〔表1〕 教科調査の平均正答率・平均正答数(小学校)

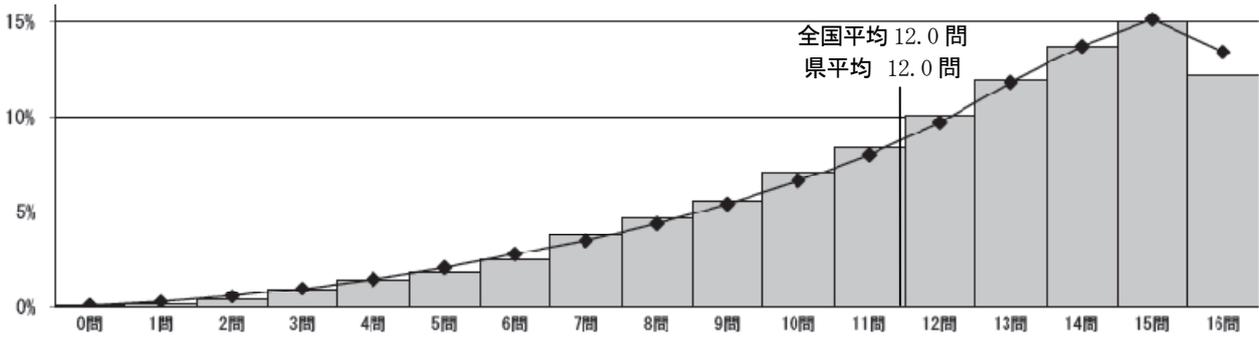
		平均正答率(%)	平均正答数
国語A	長野県(公立)	70.4	9.9/14
	全国(公立)	70.0	9.8/14
国語B	長野県(公立)	66.4	6.0/9
	全国(公立)	65.4	5.9/9
算数A	長野県(公立)	75.0	12.0/16
	全国(公立)	75.2	12.0/16
算数B	長野県(公立)	45.4	5.9/13
	全国(公立)	45.0	5.9/13
理科	長野県(公立)	61.3	14.7/24
	全国(公立)	60.8	14.6/24

#### 正答数分布グラフ

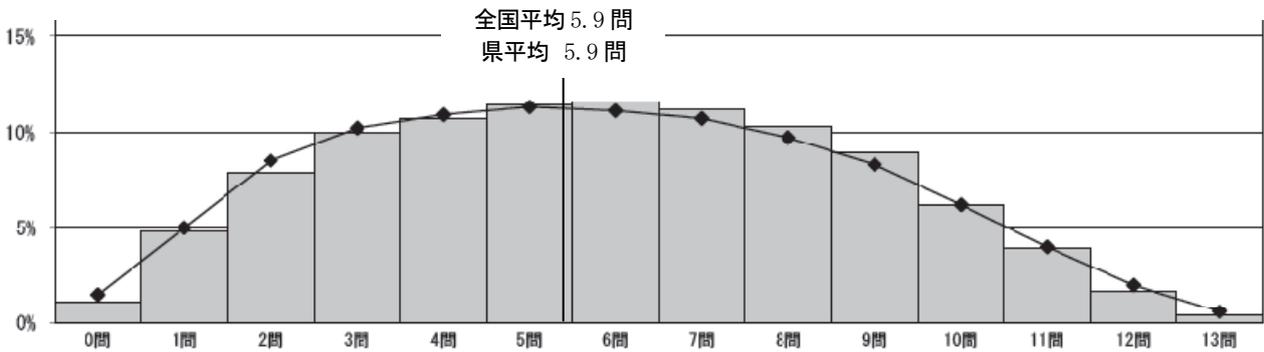
〔横軸：正答数、縦軸：割合〕



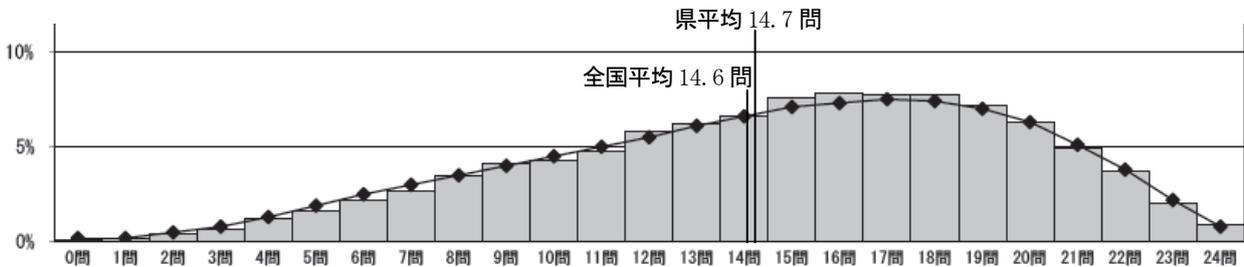
〔グラフ3〕 算数A



〔グラフ4〕 算数B



〔グラフ5〕 理科



② 分析

◇:成果 ◆:課題

◇算数Aが全国平均を僅かに下回ったものの、他の教科・科目は全国平均を上回った。〔表1〕

◇どの教科・科目も正答数分布は全国とほぼ同様の傾向である。〔グラフ1～5〕

◆国語Aでは、全問正答（14問）の児童の割合がやや少なく、10問から12問の児童の割合がやや多い。

〔グラフ1〕

◆算数Aでは、全問正答（16問）の児童の割合がやや少なく、10問から12問の児童の割合がやや多い。

〔グラフ3〕

(2) 中学校調査

① 結果

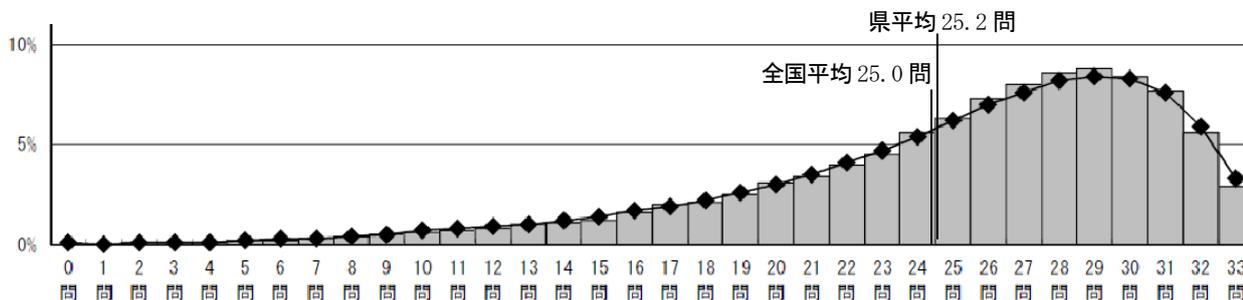
〔表2〕 教科調査の平均正答率・平均正答数(中学校)

		平均正答率(%)	平均正答数
国語A	長野県(公立)	76.2	25.2/33
	全国(公立)	75.8	25.0/33
国語B	長野県(公立)	65.0	5.9/9
	全国(公立)	65.8	5.9/9
数学A	長野県(公立)	63.5	22.9/36
	全国(公立)	64.4	23.2/36
数学B	長野県(公立)	40.6	6.1/15
	全国(公立)	41.6	6.2/15
理科	長野県(公立)	52.8	13.2/25
	全国(公立)	53.0	13.3/25

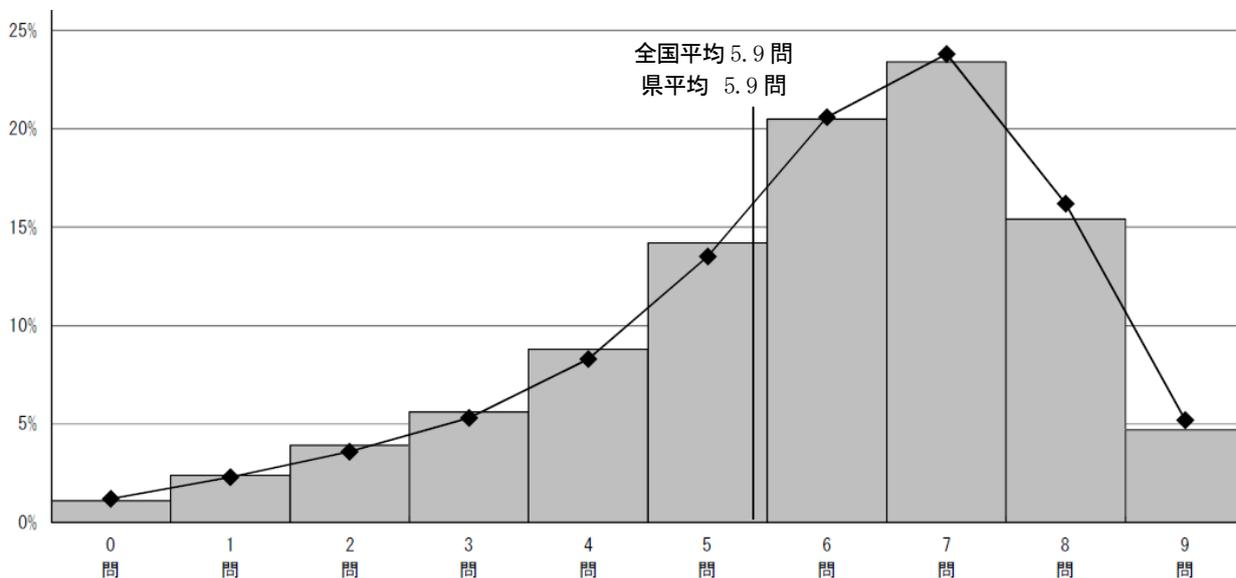
正答数分布グラフ



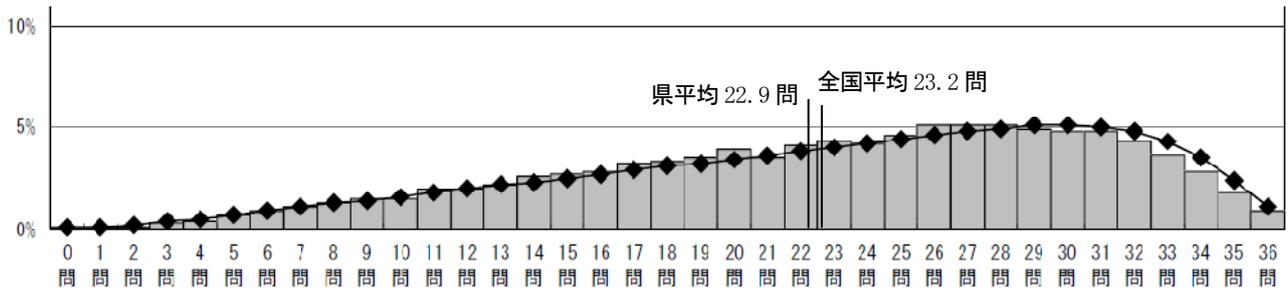
〔グラフ6〕 国語A



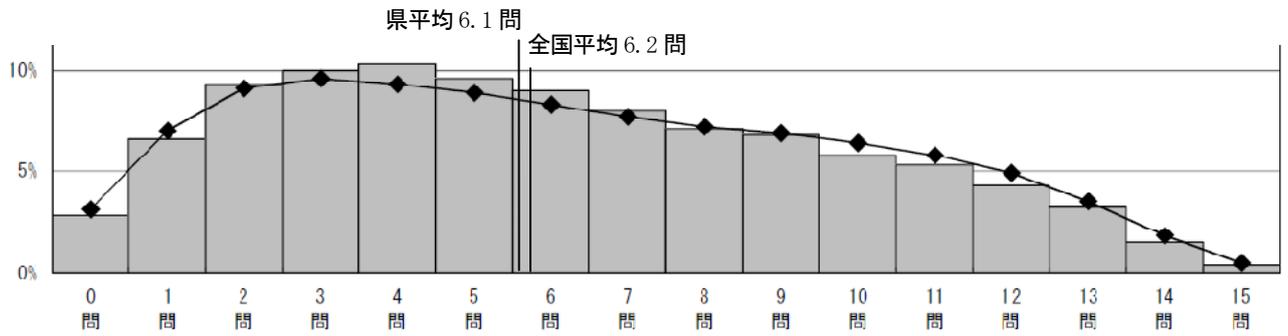
〔グラフ7〕 国語B



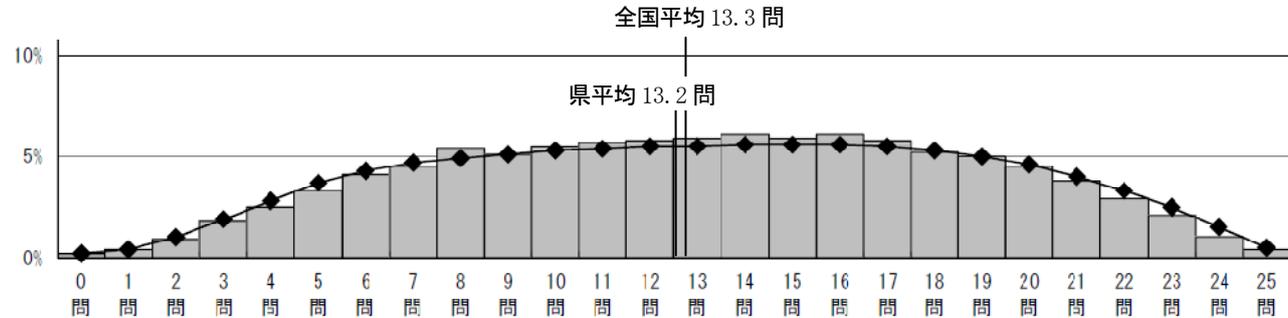
〔グラフ8〕 数学A



〔グラフ9〕 数学B



〔グラフ10〕 理科



② 分析

◇:成果 ◆:課題

◇国語Aは全国平均を上回り、国語B、数学A、数学B、理科は全国平均を下回ったものの、差はすべて1ポイント以内である。〔表2〕

◇どの教科・科目も正答数分布は、全国とほぼ同様の傾向である。〔グラフ6～10〕

◆国語、数学、理科のいずれも、全国に比べて上位層（正答率の多い生徒）の割合が少ない。〔グラフ6～10〕

◆数学Aでは、正答数が32問から35問の生徒の割合がやや少なく、17問から23問の生徒の割合がやや多くなっている。〔グラフ8〕

◆数学Bでは、正答数が10問から14問の生徒の割合が少なく、3問から7問の生徒の割合が多くなっている。〔グラフ9〕

2 過去8回（平成19年度～平成27年度）の調査結果の経年変化と分析

(1) 小学校調査

① 経年変化

〔表3〕 教科に関する調査の平均正答率(%) (H19～H27)

		H19	H20	H21	H22*	H24*	H25	H26	H27
国語A	長野県(公立)	82.2	66.5	70.4	83.4～ 84.9	81.8～ 83.0	63.7	72.6	70.4
	全国(公立)	81.7	65.4	69.9	83.2～ 83.5	81.4～ 81.7	62.7	72.9	70.0
国語B	長野県(公立)	63.0	51.2	51.1	77.7～ 79.5	54.9～ 56.7	50.3	57.0	66.4
	全国(公立)	62.0	50.5	50.5	77.7～ 78.0	55.4～ 55.8	49.4	55.5	65.4
算数A	長野県(公立)	83.7	72.1	79.5	72.9～ 75.0	72.4～ 74.1	77.8	79.1	75.0
	全国(公立)	82.1	72.2	78.7	74.0～ 74.4	73.1～ 73.5	77.2	78.1	75.2
算数B	長野県(公立)	64.3	51.2	54.4	47.6～ 49.4	57.6～ 59.6	59.5	59.0	45.4
	全国(公立)	63.6	51.6	54.8	49.1～ 49.5	58.7～ 59.1	58.4	58.2	45.0
理科	長野県(公立)					60.3～ 62.0			61.3
	全国(公立)					60.8～ 61.1			60.8

※H22、H24は抽出調査であったため、全員を対象とした調査(悉皆調査)の平均正答率が95%の確率で含まれる範囲が「〇～〇」と示されている。

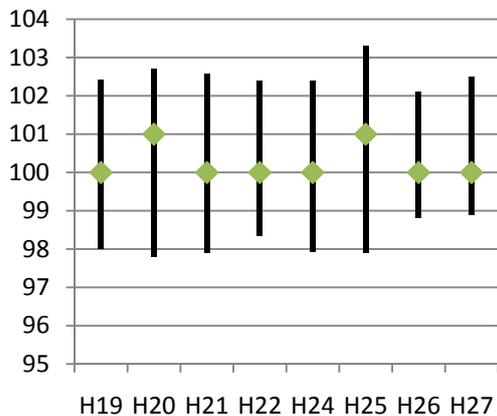
長野県の標準化得点\*と、平均正答数が高い3都道府県と低い3都道府県の標準化得点の平均

◆ 長野県の標準化得点

棒の上端:平均正答数が高い3都道府県の標準化得点の平均 棒の下端:平均正答数が高い3都道府県の標準化得点の平均

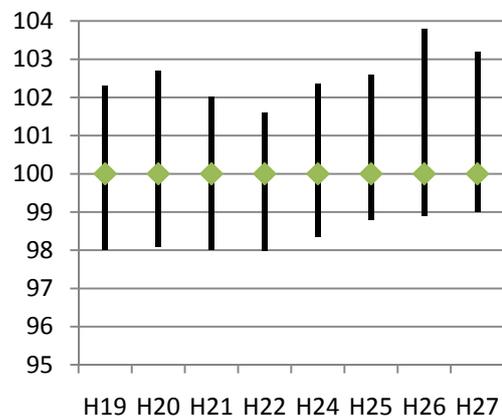
〔グラフ11〕

国語A



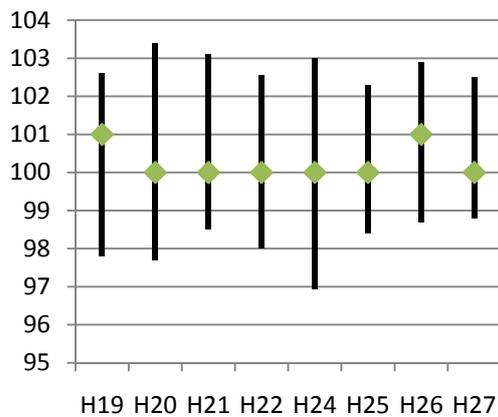
〔グラフ12〕

国語B



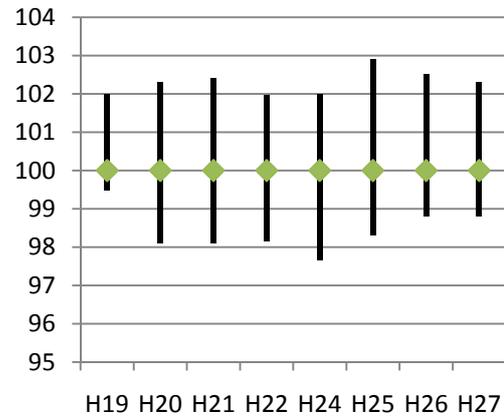
〔グラフ 13〕

### 算数A



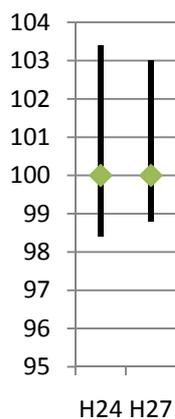
〔グラフ 14〕

### 算数B



〔グラフ 15〕

### 理科



※標準化得点…各年度の調査は問題が異なることから、平均正答率による単純な比較ができないため、年度間の相対的な比較をすることが可能となるよう、各年度の調査の全国（公立）の平均正答数がそれぞれ 100 となるように標準化した得点。

例えば、国語 A の長野県の平均正答率をみると、平成 26 年度は 72.6、平成 27 年度は 70.4 で、単純に比較すると下がっているが、全国の平均正答率は平成 26 年度が 72.9、平成 27 年度が 70.4 であり、これを基準とすると、どちらの年度も長野県の標準化得点は 100 となる。

平均正答数が高い 3 都道府県の平均と低い 3 都道府県の平均については、国が公表している各県の正答数、調査参加人数を基に事務局が算出。

## ② 分析

□:全国の傾向 ◇:成果 ◆:課題

□都道府県間の標準化得点の差は、縮小傾向にある。特に、平均正答数が低い 3 都道府県の標準化得点の平均が全国の平均に近づく状況がみられ、全体の底上げが図られている。〔グラフ 11～15〕

◇長野県の標準化得点は、平成 19 年度から本年度まで、すべての教科で 100 以上である。〔グラフ 11～15〕

◆全国の底上げが図られる中、本県の位置が棒の下方に移り、相対的にやや下降している。〔グラフ 11～15〕

(2) 中学校調査

① 経年変化

〔表4〕 教科に関する調査の平均正答率(%) (H19～H27)

		H19	H20	H21	H22*	H24*	H25	H26	H27
国語A	長野県 (公立)	83.5	74.3	77.9	73.6～ 75.2	75.6～ 77.0	76.8	79.7	76.2
	全国 (公立)	81.6	73.6	77.0	75.0～ 75.2	75.0～ 75.2	76.4	79.4	75.8
国語B	長野県 (公立)	73.0	61.3	74.8	62.6～ 65.0	62.6～ 65.0	65.9	49.4	65.0
	全国 (公立)	72.0	60.9	74.5	65.1～ 65.5	63.2～ 63.4	67.4	51.0	65.8
数学A	長野県 (公立)	73.1	63.3	62.5	61.1～ 64.1	61.2～ 63.5	61.9	67.2	63.5
	全国 (公立)	71.9	63.1	62.7	64.4～ 64.8	62.0～ 62.3	63.7	67.4	64.4
数学B	長野県 (公立)	61.8	50.4	56.7	39.7～ 42.8	47.1～ 50.4	40.2	58.1	40.6
	全国 (公立)	60.6	49.2	56.9	43.1～ 43.5	49.2～ 49.5	41.5	59.8	41.6
理科	長野県 (公立)					49.7～ 52.2			52.8
	全国 (公立)					50.9～ 51.1			53.0

※H22、H24は抽出調査であったため、全員を対象とした調査(悉皆調査)の平均正答率が95%の確率で含まれる範囲が「〇～〇」と示されている。

長野県の標準化得点と、平均正答数が高い3都道府県と低い3都道府県の標準化得点の平均

◆ 長野県の標準化得点

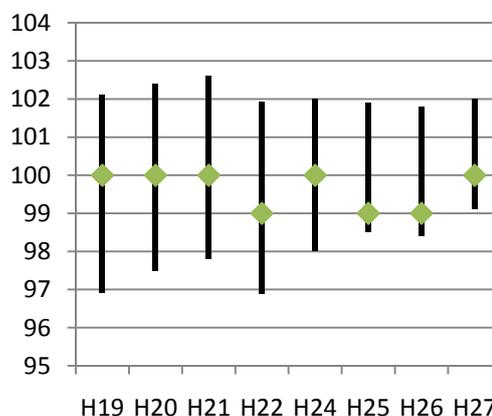
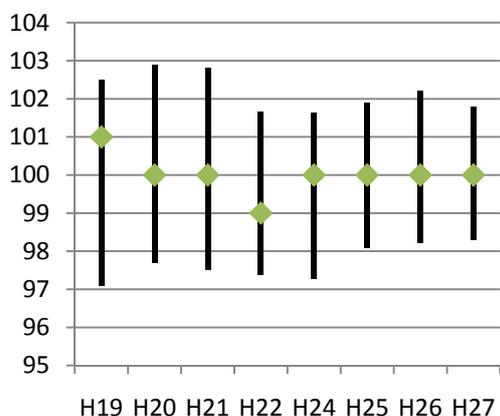
棒の上端:平均正答数が高い3都道府県の標準化得点の平均 棒の下端:平均正答数が低い3都道府県の標準化得点の平均

〔グラフ16〕

〔グラフ17〕

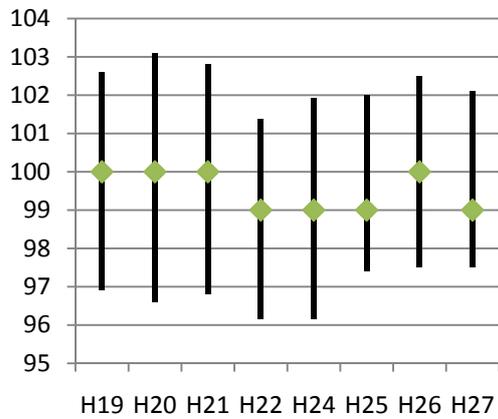
国語A

国語B



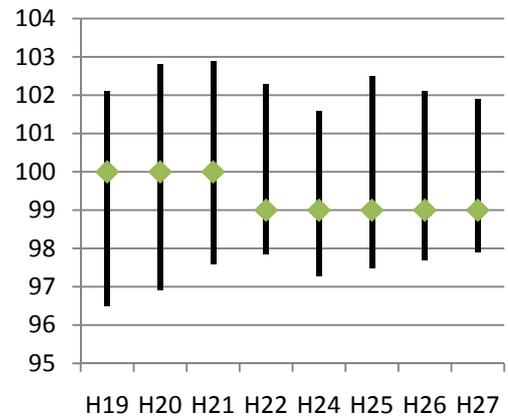
[グラフ 18]

### 数学A



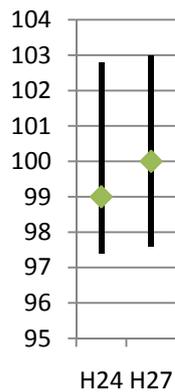
[グラフ 19]

### 数学B



[グラフ 20]

### 理科



## ② 分析

□:全国的傾向 ◇:成果 ◆:課題

□都道府県間の標準化得点の差は、縮小傾向にある。特に、平均正答数が低い3都道府県の標準化得点の平均が全国の平均に近づく状況がみられ全体の底上げが図られている。〔グラフ 16~20〕

◇国語Aの標準化得点は、平成24年度から100を保っている。〔グラフ 16〕

◇理科の標準化得点は、H24年度に比べて上昇している。〔グラフ 20〕

◆国語B、数学A、数学Bの標準化得点は、棒の下方に位置している。〔グラフ 17~19〕

### 3 教科に関する調査結果からみた長野県の成果と課題

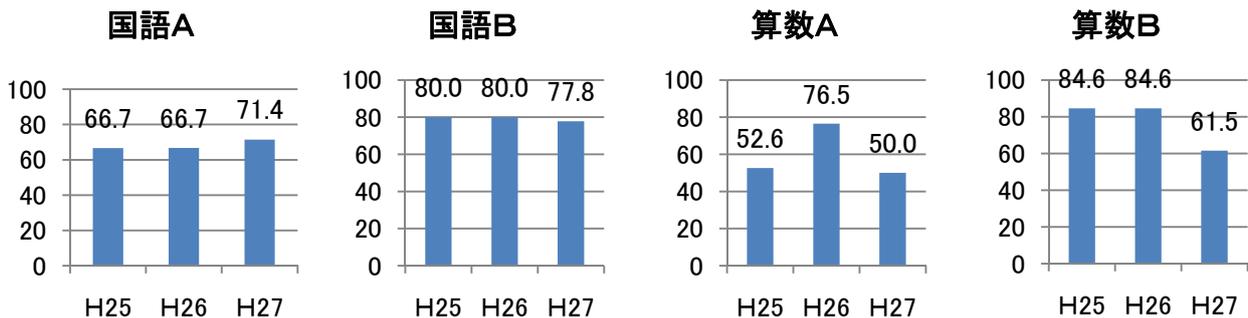
表5は、本県の平均正答率が全国の平均正答率を超えた設問数を表している。グラフ21、22は、その割合について示したものである。

〔表5〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を超えた設問数

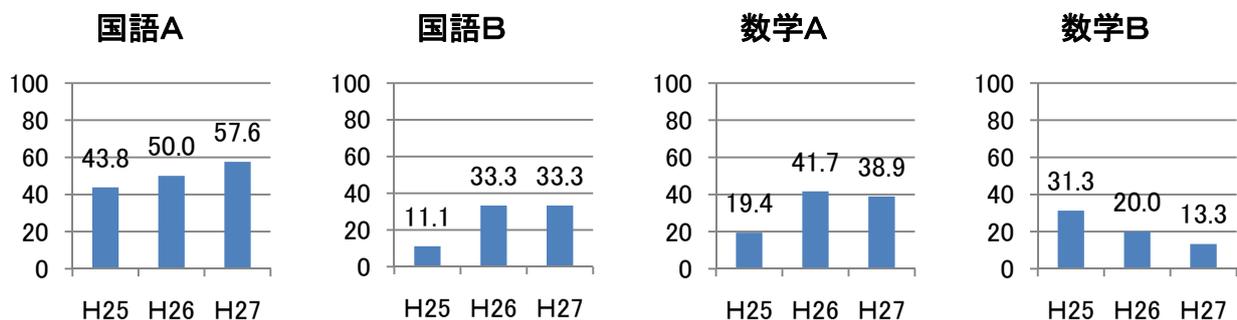
小学校	国語A	国語B	算数A	算数B	理科
H25	12/18	8/10	10/19	11/13	
H26	10/15	8/10	13/17	11/13	
H27	10/14	7/9	8/16	8/13	15/24

中学校	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
H25	14/32	1/9	7/36	5/16	
H26	16/32	3/9	15/36	3/15	
H27	19/33	3/9	14/36	2/15	12/25

〔グラフ21〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を超えた設問の割合(%) ≪小学校≫



〔グラフ22〕 本県の平均正答率が全国の平均正答率を超えた設問の割合(%) ≪中学校≫



小学校では、算数A、算数Bで全国の平均正答率を超えた設問の割合が減少傾向にある。中学校では、国語Aで増加する傾向がみられるが、数学A、数学Bは減少している。また、国語B、数学Bでは、全国の平均正答率を超えた設問の割合が低い。

全国の平均正答率との差に着目して、いくつかの設問を取り上げ、本県の成果と課題をまとめる。

(1) 主として「知識」に関する問題の調査結果

成果

- ◇小学校算数では、「式に表された数量の関係を図と関連付けて考えること」について、相当数の児童が  
できている。
- ◇中学校国語では、「伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書くこと」について、全国の平均正答  
率を上回っている。

小学校算数では、半数の設問で平均正答率が全国を下回っているが、A[8]（式と図の関連付け）の平均正答率は90.5%であり、全国を2.4ポイント上回っている。このことから、相当数の児童が式に表された数量の関係を図と関連付けて考えることができおり、場面を式に表したり、式から場面を読み取ったりすることについては、指導の成果が見られる。

8

図1のように並んだ○の個数の求め方を考えます。

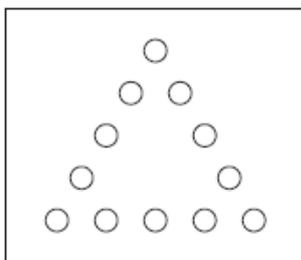


図1

正答率(%)

長野県	90.5
全国	88.1

図2、図3のように○を囲み、○の個数の求め方を式に表しました。

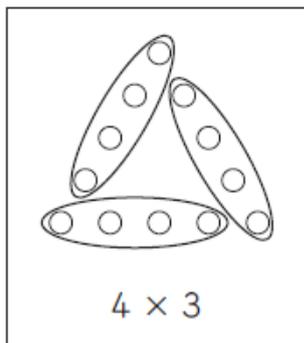


図2

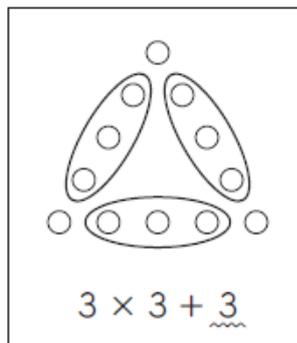


図3

図3の式の3はどの○を表していますか。

解答用紙の図の、あてはまるすべての○の中を黒くぬりましょう。



課題

- ◆中学校国語では、「単語の類別についての理解」に課題がある。
- ◆中学校数学では、「二元一次方程式の解を座標とする点の集合が直線になることの理解」に課題がある。

中学校国語では、A9四（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）の平均正答率が①56.9%、②28.8%であり、全国をそれぞれ5.4ポイント、4.9ポイント下回っている。単語の類別についての理解に課題がある。単語のもつ文法的な役割や品詞の名称を理解していない生徒や、それぞれの品詞が文のどのような成分になるかを理解していない生徒がいると考えられる。単に文法的な知識として学習するだけでなく、具体的な文章を通して考える指導の充実が求められる。

- 4 形容動詞
- 3 形容詞
- 2 動詞
- 1 名詞

私は伝えたい内容が明確になるように、次のアの文をイの文に変えました。イの文の方が、器の色が特に目を引き付けたことが伝わります。これは「青い」という①を、「青さ」という②に変えて、主語にしているためです。

ア 大きな青い器が私の目を引き付けた。

イ 大きな器の青さが私の目を引き付けた。

四 次の文章の①と②に当てはまるものとして最も適切なものを、あとの1から4までの中からそれぞれ一つ選びなさい。

①正答率(%)

長野県	56.9
全国	62.3

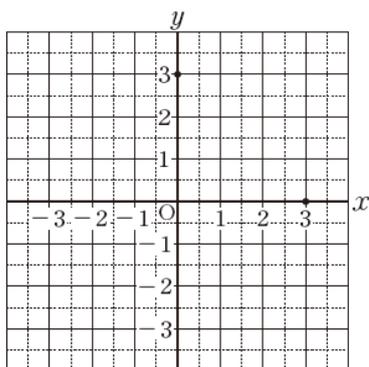
②正答率(%)

長野県	28.8
全国	33.7

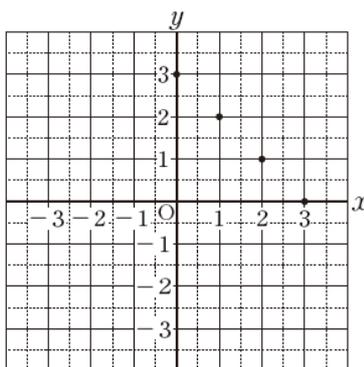
中学校数学では、A13（二元一次方程式のグラフ）の平均正答率が33.9%であり、全国を4.0ポイント下回っている。二元一次方程式の解を座標とする点の集合は直線として表されることの理解に課題があり、指導の充実が求められる。本設問と同趣旨の問題は、平成21年度にも出題されており、平均正答率は32.9%（全国35.9%）であったことから、「二元一次方程式の解は無数にあること」、「二元一次方程式の解を座標とする点の集合が直線として表されること」を理解することについて、引き続き課題がみられた。継続して課題のある内容については、県教育委員会で具体的な指導事例を示すことが必要である。

**13** 下のアからオまでの中に、二元一次方程式  $x + y = 3$  の解を座標とする点の全体を表したものがああります。正しいものを1つ選びなさい。

ア



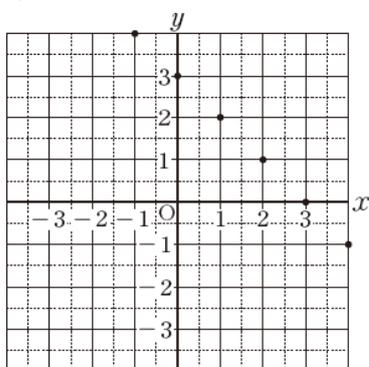
イ



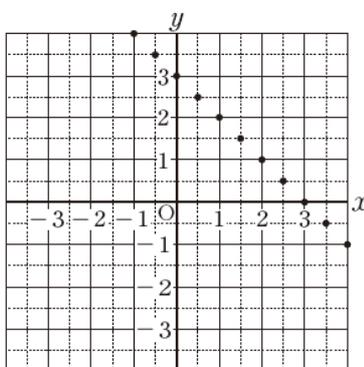
正答率(%)

長野県	33.9
全国	37.9

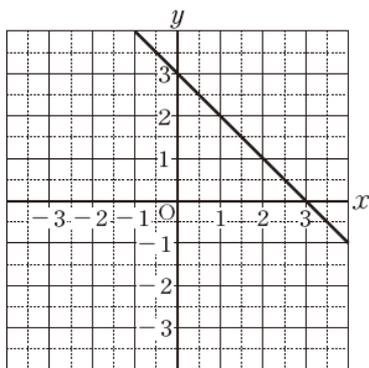
ウ



エ



オ



(2) 主として「活用」に関する問題の調査結果

成果

◇小学校国語は、継続して約8割の設問で全国の平均正答率を超えている。

◇小学校国語では、「登場人物の気持ちの変化を想像しながら音読すること」の指導について一定の成果がみられる。

◇小学校算数では、「示された割り引き後の値段の求め方の中から誤りを指摘し、正しい求め方と答えを言葉や数を用いて記述すること」の指導について一定の成果がみられる。

小学校算数では、全国の平均正答率を超えた設問の占める割合が下がったものの、B<sup>2</sup>(3)（場面の読み取りと処理・判断（おつかい））の平均正答率は54.6%で、全国を3.6ポイント上回っている。誤りを指摘し、正しい求め方と答えを言葉や数を用いて記述することの指導について、一定の成果がみられる。なお、B<sup>2</sup>(2)の平均正答率が10.6%であることから、基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えることについての課題は残されている。

(3) 最後に、パン屋で300円の食パンを買います。

たか子さんは、おつかいから帰って、値段の求め方を考えました。

今月、パン屋では、全品10%引きセールをしています。だから、300円の食パンの今月の値段は、270円になります。



店員さんが、「今日は特別に、今月の値段の30%を、さらに値引きします。」と言いました。



たか子さんはそれを聞いて、300円の食パンの値段は180円になるのではないかと思いました。



しかし、実際の値段は、180円ではなく189円でした。



たか子さんの考え

① 今月の値段（10%引きした後の値段）の求め方と答え

求め方  $300 \times 0.1 = 30$   
 $300 - 30 = 270$

答え 270円

② 今月の値段の30%を、さらに値引きした値段の求め方と答え

求め方  $300 \times 0.3 = 90$   
 $270 - 90 = 180$

答え 180円

たか子さんは、上の②の300がまちがっていることに気がきました。  
 ~~~~~部の正しい数は、いくつになりますか。また、その数を使うと、  
 ②の  の部分はどのようになりますか。  
 ~~~~~部の正しい数を書きましょう。また、その数を使った②の求め方と  
 答えを、言葉や数を使って書き直しましょう。

【平成27年度小学校算数B<sup>2</sup>(3)】

正答率(%)

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 54.6 |
| 全国  | 51.0 |

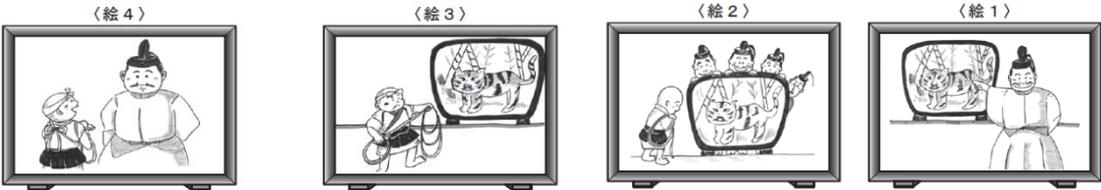
小学校国語では、B3二（相手や目的に応じて読み聞かせをするくとんち話「びょうぶのとらのお話」）の平均正答率は68.9%であり、全国を2.3ポイント上回っている。登場人物の気持ちの変化を想像しながら音読することに、やや課題が見られるものの、登場人物の気持ちの変化を捉える指導について、一定の成果がみられる。

3

六年生の山田さんの学級では、「**「びょうぶのとらのお話」**という本を読んで、紙しばいを作り、一年生に読み聞かせをすることにしました。そこで、山田さんのグループでは、その本の中から次の**「びょうぶのとらのお話」**を選び、場面の様子を**「四枚の絵」**に分けてかきました。あとの問いに答えましょう。

【四枚の絵】

【びょうぶのとらのお話】  
 中の1から5までは、まともを表しています。



1 一休さんは、それを聞いて、「かしこまりました。」  
 「では、とらをしはりあげるためのなわを貸してください。」  
 と言いました。とこのさまは、家来に言いつけてなわを持って来させました。一休さんは、なわを受け取り、広間のすみに下がりました。  
 「では、これから、とらをしはりあげます。このさまや、家来の方々は、びょうぶの裏に回ってください。とらが飛びかかるといけませんから……。」  
 とこのさまと家来は、言われるとおりにしました。一休さんが、何を始めるのかと思いましたが、とりあえずびょうぶの裏に行きました。そして、にやにや笑いながら、様子を見ていました。  
 2 一休さんは、はちまきをしめ、たすきをかけて身じたくを整え、いよいよなわを手を持ち、びょうぶの前に進み出ました。それから、足をふんばり、びょうぶの前で構えて言いました。  
 「やい、とらめ。このさまの言いつけてお前をしはりあげるぞ。さあ、出て来い。勝負だ。」  
 3 一休さんは、大まじめです。とらは、もちろん出て来ません。そう言ってから、  
 「さて、おそれをなしたか。とらめ、出て来ないな。」  
 4 びょうぶの裏の家来の方々、そこで大声をあげて、とらを追いつけてください。出て来ないしはれせんからね。」  
 5 それを聞いた家来たちは困りました。このさまはおこり顔で、「何を言うか、一休。絵のとらが、追い出せると思うか。」  
 「それはおかしい。先ほどこのさまは、このとらが、毎晩飛び出して暴れ回るとおっしゃいました。ひとりて飛び出すくらいですから、家来の方々に追い出せないわけがないでしょう。」  
 「ううむ。」  
 とこのさまは、うなづいて何も言えなくなっていました。  
 一休さんは、続けて、  
 「それとも、晩にならないと、出て来ないのでしょうか。でしたら、今夜、もう一度やり直しましょうか。」  
 それを聞いて、このさまは、  
 「もうよい。わしの負けじや。」  
 と言いましたとさ。

※1 「とんち」………その場ですぐに出るちえのこと。  
 ※2 「びょうぶ」………部屋の中に立てて、かざりや仕切りなどにするもの。

二 山田さんたちは、「びょうぶのとらのお話」のおもしろさについて、一年生にどのように伝えたいか話し合っています。次の**「話し合いの様子②」**をよく読んで、あとの**（問い）**に答えましょう。

【話し合いの様子②】

山田 「一休さんが家来たちに、「とらを追いつけてください。出て来ないしはれせんからね。」と言ったところがおもしろいよね。  
 私もそう思うわ。このさまが言った無理なことに対して、一休さんがちえを働かせているところよね。このさまはおこって言い返したけれど、一休さんに「それはおかしい。」と言われて、「ううむ。」とうなづいてしまっね。  
 小川 最後は、このさまは、「もうよい。わしの負けじや。」と言ったけれど、どんな気持ちだったのかな。どんなふうにして読むといいかな。いろいろ読み方を考えてみよう。  
 高木 5（話し合いが続く）5

（問い）「もうよい。わしの負けじや。」を、あなたならどのように声に出して読みますか。次の条件に合わせて書きましょう。

（条件）

- 声に出して読むときにくふうすることを書くこと。くふうすることとしては、例えば、声の大きさや高さ、読む速さなどがある。
- なぜそのように読むのかという理由を書くこと。理由には、あなたが想像したこのさまの気持ちを取り上げること。
- 四十字以上、八十文字以内にまとめて書くこと。

正答率(%)

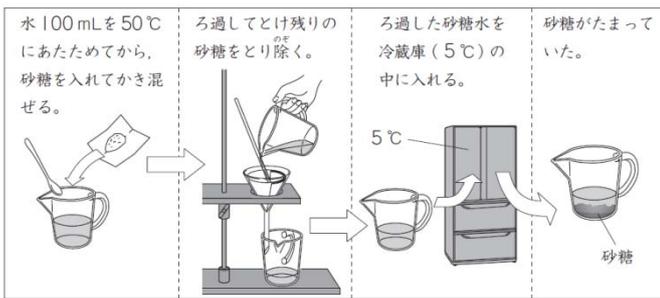
|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 68.9 |
| 全国  | 66.6 |

課題

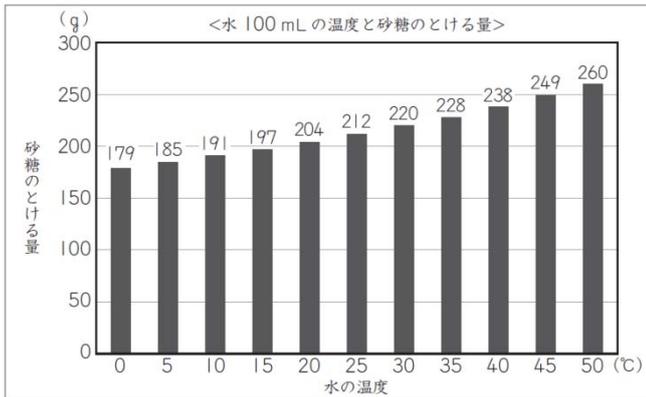
- ◆小学校理科では、「グラフを考察して分析し、変化とその要因について関連付けて考えること」に課題がある。
- ◆中学校国語では、「目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出して、それらを基に自分の考えを具体的にまとめること」に課題がある。
- ◆中学校数学では、「事柄が成り立つ理由を構想を立てて説明すること」に課題がある。
- ◆中学校理科では、「観察・実験の結果を、視点をもって分析して解釈すること」に課題がある。

小学校理科では、**3** (6) (物の溶け方の規則性) の平均正答率は 25.1% であり、全国を 3.8 ポイント下回っている。実験の結果を示したグラフを基に定量的に捉えて考察することに課題がある。グラフを基に考察して分析する際に、変化の要因となる事柄を関連付けて考えることの指導を充実していく必要がある。

(6) としおさんは、20℃の水 100 mL を 50℃にあたためてから、砂糖を入れてかき混ぜました。すると、とけ残りが出たので、ろ過してから砂糖水を冷蔵庫で保管しました。次の日、冷蔵庫からとり出すと、底に砂糖がたまっていました。



そこで、としおさんは、水の温度と砂糖が水にとける量との関係調べました。



としおさん: グラフから、ろ過してとけ残った砂糖をとり除いた 50℃の砂糖水には、260g の砂糖がとけていることがわかるね。

ゆかりさん: 水の温度が下がると、砂糖のとける量が減っていくんだね。

前のページのグラフから考えると、砂糖水を 5℃の冷蔵庫からとり出したとき、とけきれなくなってたまっていた砂糖は約何gだと考えられますか。下の **1** から **4** までの中から 1 つ選んで、その番号を書きましょう。また、その番号を選んだわけを書きましょう。

- 1 約 19 g
- 2 約 75 g
- 3 約 185 g
- 4 約 260 g

【平成 27 年度小学校理科**3** (6)】

正答率(%)

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 25.1 |
| 全国  | 28.9 |

中学校では、活用する力に課題があることについてこれまでも指摘してきた。本年度も、全国の平均正答率を超えた設問の割合は、国語 B が 33.3%、数学 B が 13.3% であり、引き続き課題がみられる。

中学校国語では、B**2**三 (情報を関連させて読む (2020 年)) の平均正答率は、22.3% であり、全国を 0.7 ポイント下回っている。複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書くことに課題がある。

【A ウェブページの文章】

## Discover Tomorrow ～未来(あした)をつかもう～

世界のスポーツ界が急速な変化や様々なチャレンジに直面する中で、東京は「素晴らしい大会を確実に開催し、オリンピックとパラリンピックの価値を次世代に受け継いでいく」ことを訴え、招致の成功を実現することができました。そのメッセージは、世界に約束できる3つの強みによって支えられています。

まず、安心、安全、確実な大会開催。世界有数のインフラやセキュリティを誇る東京の都市力に加え、大会は政府のバックアップを受けて開催されます。数々の国際競技大会開催経験に基づく日本の運営能力も、円滑な大会運営に貢献します。

次に、オリンピック・パラリンピックへの日本の情熱。大都市東京の中心で、多くのファンによって選手に大歓声が送られる大会は、かつて類を見なかったような素晴らしい祝祭となって、世界中の人々を熱狂に駆り立てます。

3つめに、イノベーション。最先端都市東京の中心で、日本のテクノロジーや想像力を結集し革新に満ちた大会を開催することで、オリンピック・パラリンピックのインスピレーションを世界中の若者たちへ届けることができます。

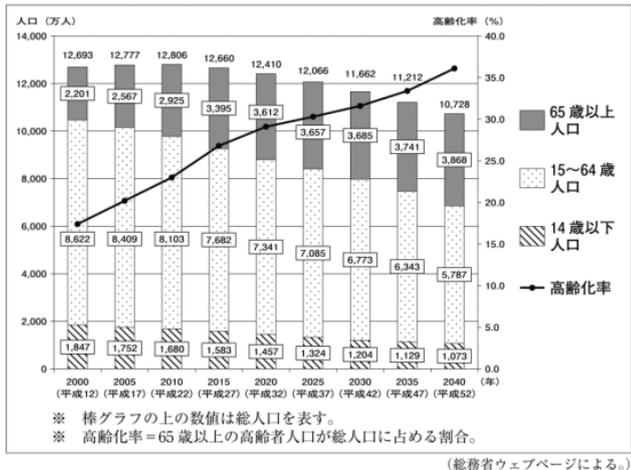
また、招致が決定したブエノスアイレスのIOC総会では、日本のプレゼンターが、東日本大震災以降、日本人があらためて気づいたスポーツの真の力についても訴えました。

震災復興に際して、多くのアスリートたちが被災地に足を運んでいます。活動の中で、子供たちがスポーツを通じて少しずつ笑顔になっていく様子を目の当たりにし、私たちはスポーツやアスリートが社会において果たせる役割についてあらためて気づくことができました。2020年の大会開催に向けて、今度はそのスポーツの力を世界に伝えて、社会におけるスポーツの価値向上に貢献する、それが日本の決意です。

(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ウェブサイトによる。)

(注1) インフラ=インフラストラクチャーの略。道路、鉄道、学校、病院など、社会生活の基盤となる構造物の総称。  
(注2) イノベーション=技術革新。これまでとは異なった新しい発見。  
(注3) インスピレーション=ここでは、オリンピックやパラリンピックがもたらす刺激のこと。  
(注4) IOC総会=国際オリンピック委員会の会議。

【B 日本の人口推移を表したグラフ】



### 生活を支援するロボットの開発

世界では、様々なロボットの開発が進められている。例えば、人の移動を支援する搭乗型ロボット。このロボットの中には、10年以上前から実用化されているものもあり、空港でのパトロールなどに使われている。

現在、日本では、「生活支援ロボット」の開発が行われている。誰でも簡単に乗り降りでき、日常生活での移動を助ける搭乗型ロボットの開発に加え、装着型ロボットの開発も進んでいる。これは、装着した人の意思を読み取って身体の動きをサポートするロボットである。身体機能の回復のためのリハビリテーションなどで既に一部導入されているが、今後は、足腰の弱った人の歩行支援、重たい荷物の持ち上げ、レスキュー活動など、幅広い場面での活用が期待されている。

このように、人間の生活を支援するロボットの開発が、日夜進められているのだ。



搭乗型ロボットの例



装着型ロボットの例

【C 雑誌の記事の一部】

【平成27年度中学校国語B23】

(正答の条件)

次の条件を満たして解答している。

- ①【A ウェブページの文章】、【B 日本の人口推移を表したグラフ】、【C 雑誌の記事の一部】の中からいずれか二つを選んで、その記事を塗り潰している。
- ②選んだ二つの資料の内容を適切に取り上げて書いている。
- ③2020年の日本がどのような社会になっているかを予想して具体的に書いている。
- ④社会にどのように関わっていきたくを具体的に書いている。
- ⑤「二〇二〇年の日本は、」に続けて、八十字以上百二十字以内で書いている。

目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出すことはできているが、それらを基に自分の考えを具体的にまとめることに特に課題がみられた。

| 正答率(%) |      |
|--------|------|
| 長野県    | 22.3 |
| 全国     | 23.0 |

平成24年度全国学力・学習状況調査【小学校】国語B34では、「複数の記事を結び付けながら読み、事実を基にして自分の考えをもつことができるかどうかをみる」問題が出題されている。この問題の平均正答率は、39.3% (全国 37.7%) で課題はみられたものの、全国を1.6ポイント上回っていた。平成24年度は抽出調査であったが、同一の生徒が対象であることを考えると、目的に応じて自分の考えを具体的に書くことについての指導の充実が求められる。

※ 次のページの枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

三 あなたは、二〇二〇年の日本は、どのような社会になっていると予想しますか。また、その社会にどのように関わっていきたくを思っていますか。あなたの考えを、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線でも消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 資料「A ウェブページの文章」、「B 日本の人口推移を表したグラフ」、「C 雑誌の記事の一部」の中から、いずれか二つを選び(どの資料を選んでもかまいません)、それらの内容を取り上げて具体的に書くこと。

条件2 「二〇二〇年の日本は、」に続けて、八十字以上、百二十字以内で書くこと(解答用紙に書かれている書き出しの字数を含みます)。

陸上クラブの金子さんは、長い距離を速く走ることを目標にしています。そこで、子ども向けの雑誌の中から陸上競技について書かれた記事を探して読みました。次の「月刊『未来へはばたく☆小学生』」の「一部」を読んで、あとの問いに答えましょう。

【月刊『未来へはばたく☆小学生』の一部】

# 特集 マラソン 第1回

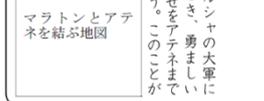
2012年7月、ロンドンオリンピックが開幕する。陸上競技の中で、最も長い距離を走るマラソン。身体的限界にいよいよ選手たちの姿は、人々の心をひきつける。今回から3回にわたって、マラソンを特集し、その魅力などを紹介していく。



男子マラソンのスタート直後 (2011年世界陸上競技選手権)  
マラソンの距離は、なんと42.195km(★豆知識コーナー)。世界共通である。男子も女子も同じ距離を走る。この距離で行われるマラソンを「フルマラソン」という。世界各地の市民向けの大会などで取り入れられているハーフマラソン(21.0975km)なども「マラソン」と呼ぶことがある。

★豆知識コーナー  
マラソンのほじまり  
かつて古代ギリシャが、ペルシャの大軍に「 Marathon の戦い」で勝ったとき、勇ましいギリシャ人の一人が、その知らせをアテネまでの約40km走って伝えたという。このことがもとになり、1896年にアテネで開かれた第1回オリンピックにおいて、Marathon とアテネの間で競走が行われた。これが、マラソンのはじまりであるといわれている。

- (各回の主な内容)  
【第1回】(4月号)  
■世界のトップランナー  
・何km(キロメートル)走るの? (15ページ)  
・トップランナーの走るスピードは… (16ページ)  
・トップランナーの練習法 (17~18ページ)  
【第2回】(5月号)  
■今、マラソンが人気! 増える市民ランナーたち  
【第3回】(6月号)  
■あなたも長い距離を走ってみよう!



トップランナーの走るスピードは…  
42.195kmをいかに速く走りぬけるかを競うマラソン。2011年7月現在、男子の世界記録は、2時間03分59秒で、ハイレ・ゲブレシラシエ選手(エチオピア)がもっている。女子の世界記録は、2時間15分25秒で、ポーラ・ラドクリフ選手(イギリス)がもっている。100mを何秒で走る計算になるかという点、男子が約17.6秒、女子が約19.3秒。この速さで走り続けるのだから、おどろきである。

【マラソンの世界記録上位5人】 ▼国際陸上競技連盟の資料を参考にした。(2011年7月現在)(男子選手)

| 順位 | 記録        | 選手の名前       | 国籍・所属 | 場所     | 年    |
|----|-----------|-------------|-------|--------|------|
| 1  | 2時間03分59秒 | ハイレ・ゲブレシラシエ | エチオピア | ベルリン   | 2008 |
| 2  | 2時間04分27秒 | ダンカン・キベト    | ケニア   | ロッテルダム | 2009 |
| 4  | 2時間04分40秒 | エマヌエル・ムタイ   | ケニア   | ロンドン   | 2011 |
| 5  | 2時間04分48秒 | パトリック・マカウ   | ケニア   | ロッテルダム | 2010 |

男子が2時間をきる日は、いつだろうか…

野口みずき選手の写真

| 順位 | 記録        | 選手の名前      | 国籍・所属 | 場所   | 年    |
|----|-----------|------------|-------|------|------|
| 1  | 2時間15分25秒 | ポーラ・ラドクリフ  | イギリス  | ロンドン | 2003 |
| 2  | 2時間18分47秒 | キャサリン・ヌデレバ | ケニア   | シカゴ  | 2001 |
| 3  | 2時間19分12秒 | 野口みずき      | 日本    | ベルリン | 2005 |
| 4  | 2時間19分19秒 | イリーナ・ミキテンコ | ドイツ   | ベルリン | 2008 |
|    |           | メアリー・ケイター  | ケニア   | ロンドン | 2011 |

### 日本人選手の記録

(男子選手)  
男子の日本記録をもつのは、高岡寿成選手。  
2002年のシカゴマラソンで、2時間06分16秒の記録を出した。この記録は、世界第29位にあたる。(2011年7月現在)

(女子選手)  
女子の世界記録を上位10人まで見ると、次の選手たちもその中に入る。

- ◆ 浜井陽子選手  
→ 2時間19分41秒【世界第8位】(2004年 ベルリン)
- ◆ 高橋尚子選手  
→ 2時間19分46秒【世界第9位】(2001年 ベルリン)

(大募集! 読者からの質問) マラソンについての質問をどしどしお寄せください。くわしくは28ページを…

正答率(%)

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 39.3 |
| 全国  | 37.7 |

- 「マラソンの世界記録上位5人」と「日本人選手の記録」の二つの記事を結び付けながら読み、金子さんの考えの理由となる事実を、両方から取り出したり、まとめて書くこと。
- 「そのように考えた理由は、」に続くように、四十文字以上、六十文字以内にまとめて書くこと。

〔条件〕

日本の男子選手は、…

〜(省略)〜

〔金子さんがまとめた内容〕

日本の女子選手は、世界的に活やくしてきたと考えられます。そのように考えた理由は、

四 金子さんは、日本の女子選手と男子選手のそれぞれについて考えたことをまとめています。〔金子さんがまとめた内容〕の中には、どのような内容を書くかといですか。あとの条件に合わせて書きましょう。

中学校数学では、B<sup>2</sup>(2) (構想を立てて説明し、発展的に考えること(連続する整数の和))の平均正答率が38.3%であり、全国を4.8ポイント下回っている。事柄が成り立つ理由を、構想を立てて説明することに課題がある。

(2) 前ページの予想がいつでも成り立つことを説明します。下の説明を完成しなさい。

2 連続する3つの整数の和がどんな数になるかを調べます。

1, 2, 3 のとき  $1 + 2 + 3 = 6 = 3 \times 2$   
 3, 4, 5 のとき  $3 + 4 + 5 = 12 = 3 \times 4$   
 10, 11, 12 のとき  $10 + 11 + 12 = 33 = 3 \times 11$

これらの結果から、次のように予想できます。

予想

連続する3つの整数の和は、中央の整数の3倍になる。

中学校数学A<sup>2</sup>(4)では、「文字を用いた式で数量の関係を説明するための構想を理解しているかどうかをみる」問題が出題されている。平均正答率は54.6%であり、全国を2.4ポイント下回っている。構想の必要性と意味の理解にも課題がある。

平成24年度全国学力・学習状況調査【中学校】数学B<sup>2</sup>(1)では、「事柄が成り立つ理由を、示された方針に基づいて説明することができるかどうかをみる」問題が出題されている。平均正答率は31.8%(全国36.3%)であり、課題が解消されないままの状態が続いている。事柄が成り立つ理由を、構想を立て根拠を明確にして説明することができる指導の充実が求められる。

2 智也さんは、連続する3つの自然数の和がどんな数になるかを調べています。

1, 2, 3 のとき  $1 + 2 + 3 = 6$   
 2, 3, 4 のとき  $2 + 3 + 4 = 9$   
 3, 4, 5 のとき  $3 + 4 + 5 = 12$

$6 = 3 \times 2$   
 $9 = 3 \times 3$   
 $12 = 3 \times 4$   
 3つとも3の倍数になっているね。



上で調べたことから、智也さんは、次のことを予想しました。

智也さんの予想

連続する3つの自然数の和は、3の倍数になる。

7, 8, 9のときは、  
 $7 + 8 + 9 = 24$   
 $24 = 3 \times 8$   
 予想どおり、このときも3の倍数になっている。



説明

連続する3つの整数のうち最も小さい整数を  $n$  とすると、連続する3つの整数は、 $n, n+1, n+2$  と表される。それらの和は、

$$n + (n + 1) + (n + 2) =$$

正答率(%)

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 38.3 |
| 全国  | 43.1 |

【平成27年度中学校数学B<sup>2</sup>(2)】

(4) 次の問題について考えます。

問題

「連続する3つの整数の和は、中央の整数の3倍になる」ことを、文字式を使って説明しなさい。

連続する3つの整数の和は、例えば、

1, 2, 3 のとき  $1 + 2 + 3 = 6$

となり、6は中央の整数である2の3倍です。

「連続する3つの整数の和は、中央の整数の3倍になる」ことは、次のように考えると、説明することができます。

- ① 連続する3つの整数のうち最も小さい整数を  $n$  として、連続する3つの整数を  $n, n+1, n+2$  と表す。
- ② それらの和が中央の整数の3倍になることを示すために、それらの和を  $3 \times (\square)$  の形の式に変形する。

このとき、上の  $\square$  に当てはまる式を、 $n$  を用いて書きなさい。

正答率(%)

【平成27年度中学校数学A<sup>2</sup>(4)】

|     |      |    |      |
|-----|------|----|------|
| 長野県 | 54.6 | 全国 | 57.0 |
|-----|------|----|------|

(1) 智也さんの予想がいつでも成り立つことを説明します。下の説明を完成しなさい。

3の倍数であることを説明するには、3と自然数の積になることをいえばいいんだ。

説明

連続する3つの自然数のうち、最も小さい数を  $n$  とすると、連続する3つの自然数は、 $n, n+1, n+2$  と表される。したがって、連続する3つの自然数の和は、

$$n + (n + 1) + (n + 2) =$$

正答率(%)

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 31.8 |
| 全国  | 36.3 |

【平成24年度中学校数学B<sup>2</sup>(1)】

中学校理科では、**1** (2) (入浴剤とベーキングパウダーを科学的に探究する) の平均正答率が 30.5% であり、全国を 2.1 ポイント下回っている。観察・実験の結果を分析し、解釈することに課題がある。分析・解釈の場面で活用できるように知識の確実な定着を図る指導の充実が求められる。

**1** 良子さんたちは、保健だよりの記事に興味をもって、調べたり実験を行ったりしました。(1)から(6)までの各問に答えなさい。

### 保健だより

**疲れをとる入浴  
～入浴剤の効果～**



入浴剤の効果  
○保温  
○保湿

入浴剤の主な原材料  
○塩化ナトリウム  
○炭酸水素ナトリウム  
○硫酸ナトリウム  
○.....

**ベーキングパウダーを使って  
ふっくら蒸しパンをつくらう**



ベーキングパウダーの  
主な原材料  
○炭酸水素ナトリウム  
○クエン酸  
○コーンスターチ  
○小麦粉

蒸しパンのつくり方  
○.....  
○.....



**入浴剤の記事に関すること1**

良子：入浴剤の主な原材料には、塩化ナトリウムがあるんだね。  
 太郎：そうだね。風呂のお湯に溶かすと濃度はどのくらいかな。

**正答率(%)**

|     |      |
|-----|------|
| 長野県 | 30.5 |
| 全国  | 32.6 |

**入浴剤の記事に関すること2**

良子：炭酸水素ナトリウムと硫酸ナトリウムは、水に溶ける量に違いがあるのかな。  
 太郎：2本の試験管を用意して、一方には炭酸水素ナトリウムを、他方には同じ質量の硫酸ナトリウムを入れて、40℃の同じ量の水を加えて溶かしてみよう。  
 次郎：どちらに何を溶かしたのか、わからなくなったよ(図1)。  
 良子：40℃での溶解度の表から、溶け残った質量が大きい物質は **X** だね。だから、炭酸水素ナトリウムを溶かした方は **Y** の試験管だね。

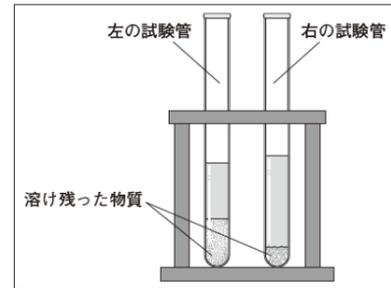


図1

表

|           |         |
|-----------|---------|
| 炭酸水素ナトリウム | 硫酸ナトリウム |
| 12.7g     | 48.1g   |

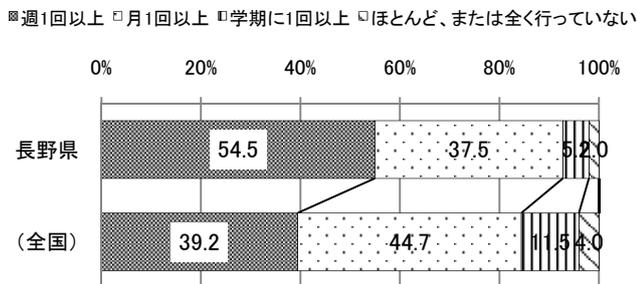
\* 40℃での溶解度

(2) 上の **X** , **Y** に当てはまる正しいものを、それぞれ下のア、イから1つ選びなさい。

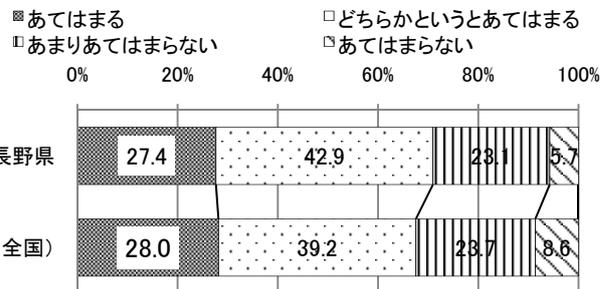
|   |             |           |
|---|-------------|-----------|
| X | ア 炭酸水素ナトリウム | イ 硫酸ナトリウム |
| Y | ア 左         | イ 右       |

【平成27年度中学校理科**1**(2)】

〔グラフ23〕 理科の授業では、理科室で観察や実験をどのくらい行ったか(中学校生徒質問紙)



〔グラフ24〕 理科の授業で観察や実験の結果をもとに、考察しているか(中学校生徒質問紙)



グラフ23は、理科の授業での観察や実験の頻度を表している。グラフ24は、観察や実験の分析・解釈の状況について示している。本県の中学校では、観察や実験の頻度は全国と比べて高いものの、分析・解釈を行っている割合はやや低いことが伺える。充実した観察や実験の実施状況を生かし、生徒が視点をもって分析・解釈ができるような指導の充実を一層行いたい。

#### 4 教科に関する長野県の成果と課題（まとめ）

##### 《小学校》

- ◇算数Aが全国平均を僅かに下回ったものの、他の教科・科目は全国平均を上回った。
- ◆全国の底上げが図られる中、本県の位置が棒の下方に移り、相対的にやや下降している。
- ◇国語では、登場人物の気持ちの変化を捉える指導について、一定の成果がみられる。
- ◇算数では、誤りを指摘し、正しい求め方と答えを言葉や数を用いて記述することの指導について、一定の成果がみられる。
- ◆理科では、グラフを考察して分析し、変化とその要因について関連付けて考えることに課題がある。

##### 《中学校》

- ◇国語Aは全国平均を上回り、国語B、数学A、数学B、理科は全国平均を下回ったものの、差はすべて1ポイント以内である。
- ◆国語、数学、理科のいずれも、全国に比べて上位層の割合が低い。
- ◆国語B、数学A、数学Bの標準化得点は、棒の下方に位置している。
- ◆国語の「単語の類別についての理解」や数学の「二元一次方程式の解を座標とする点の集合が直線になることの理解」など、知識の確実な定着に課題がある。
- ◆国語では、目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出して、それらを基に自分の考えを具体的にまとめることに課題がある。
- ◆数学では、事柄が成り立つ理由を構想を立てて説明することに課題がある。
- ◆理科では、観察・実験の結果を、視点をもって分析して解釈することに課題がある。

### Ⅲ 県教育委員会の学力向上施策に対する評価

#### 1 「平成 25・26 年度 全国学力・学習状況調査 長野県分析委員会」からの提言と県教育委員会の対応

平成 25 年度、26 年度に設置された「全国学力・学習状況調査 長野県分析委員会」では、全国学力・学習状況調査の結果を分析し、本県の児童生徒の学力向上のための提言を報告書にまとめた。

表 6 に示すように、2 年間で 22 の提言を行った。

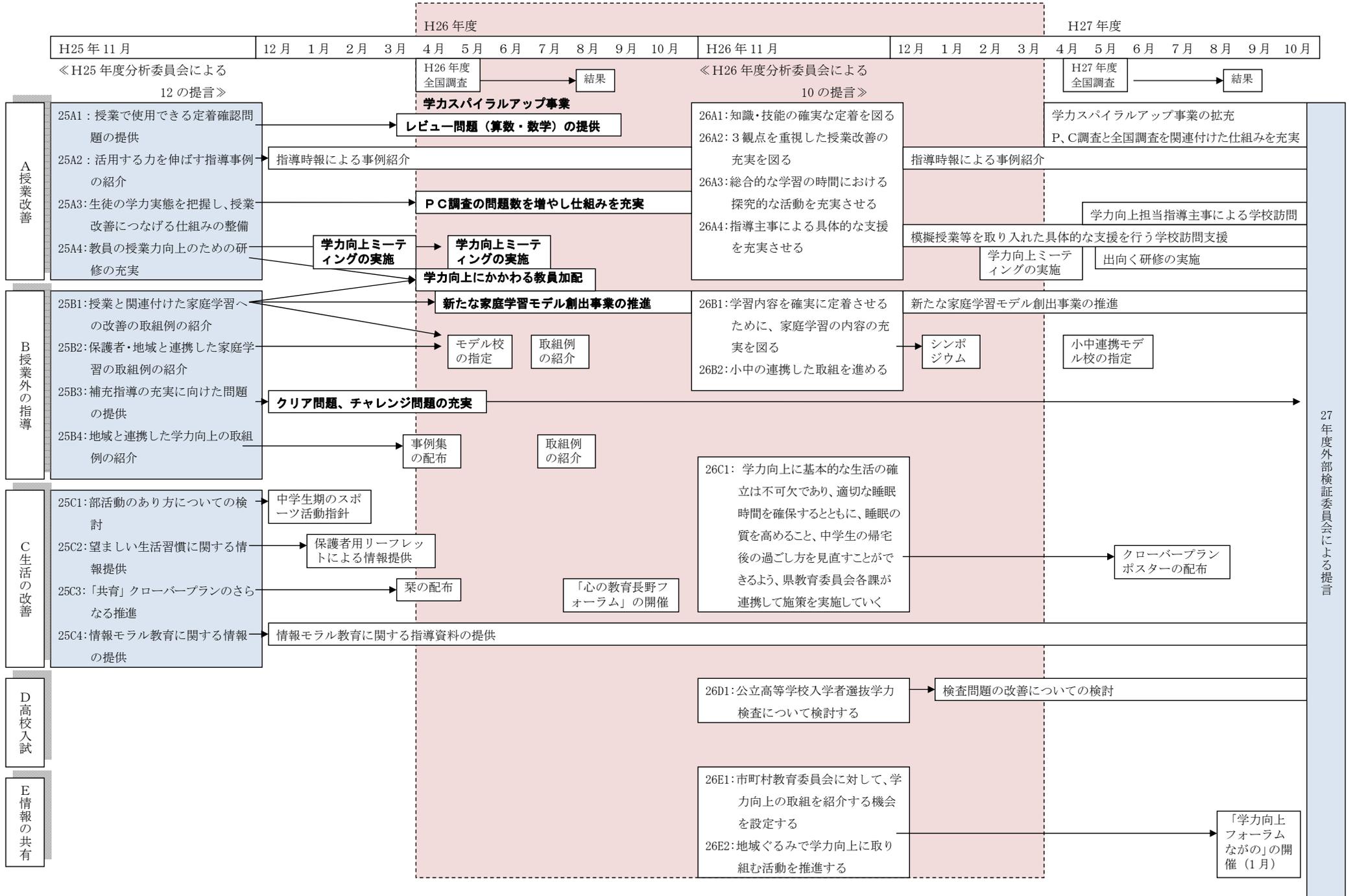
〔表 6〕 分析委員会からの提言

|                 | H25 年度分析委員会による 12 の提言   | H26 年度分析委員会による 10 の提言   |
|-----------------|---|---|
| <b>A 授業改善</b>   | 25A 1 授業で使用できる定着確認問題の提供<br>25A 2 活用する力を伸ばす指導事例の紹介<br>25A 3 生徒の学力実態を把握し、授業改善につなげる仕組みの整備<br>25A 4 教員の授業力向上のための研修の充実   | 26A 1 知識・技能の確実な定着を図る<br>26A 2 3 観点を重視した授業改善の充実を図る<br>26A 3 総合的な学習の時間における探究的な活動を充実させる<br>26A 4 指導主事による具体的な支援を充実させる |
| <b>B 授業外の指導</b> | 25B 1 授業と関連付けた家庭学習への改善の取組例の紹介<br>25B 2 保護者・地域と連携した家庭学習の取組例の紹介<br>25B 3 補充指導の充実に向けた問題の提供<br>25B 4 地域と連携した学力向上の取組例の紹介 | 26B 1 学習内容を確実に定着させるために、家庭学習の内容の充実を図る<br>26B 2 小中の連携した取組を進める   |
| <b>C 生活の改善</b>  | 25C 1 部活動のあり方についての検討<br>25C 2 望ましい生活習慣に関する情報提供<br>25C 3 「共育」クローバープランのさらなる推進<br>25C 4 情報モラル教育に関する情報の提供               | 26C 1 学力向上に基本的な生活の確立は不可欠であり、適切な睡眠時間を確保するとともに、睡眠の質を高めること、中学生の帰宅後の過ごし方を見直すことができるよう、県教育委員会各課が連携して施策を実施していく           |
| <b>D 高校入試</b>   |   | 26D 1 公立高等学校入学者選抜学力検査について検討する   |
| <b>E 情報の共有</b>  |   | 26E 1 市町村教育委員会に対して、学力向上の取組を紹介する機会を設定する<br>26E 2 地域ぐるみで学力向上に取り組む活動を推進する  |

提言を受けた長野県教育委員会は、次ページのように学力向上施策を進めた。

[図 23 学力向上に関する提言と県教育委員会の取組の一覧

ゴシックは評価の対象となる施策・取組

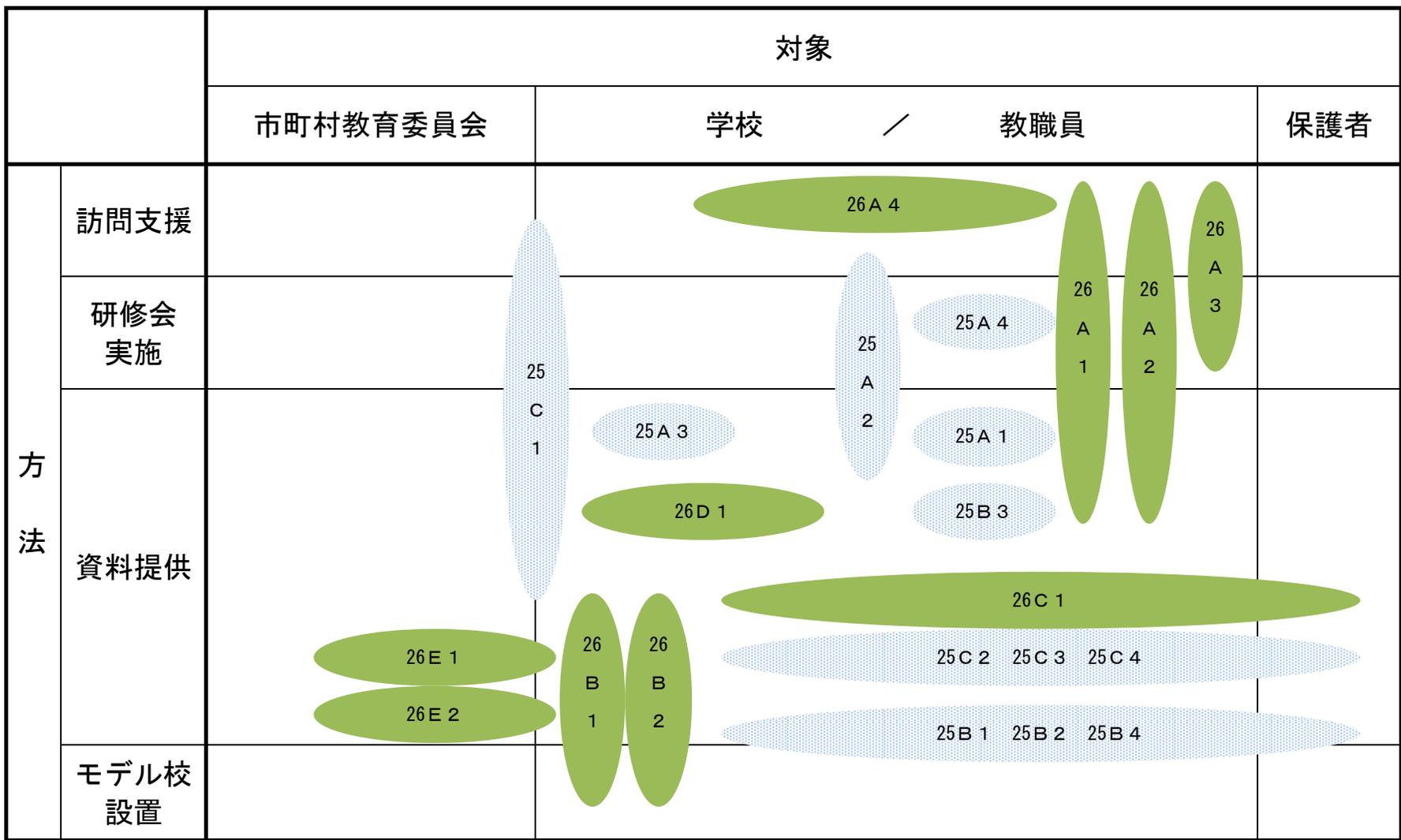


27年度外部検証委員会による提言

提言を受けて行った取組を、「方法」と「対象」を観点に、次の図 24 のように整理した。

〔図 24〕 提言に基づく学力向上施策のレイアウト

※数字は分析委員会からの提言の番号を表している。



この図から、市町村教育委員会や保護者に対して行う施策を充実していくことが必要であると考えられる。

## 2 平成 26 年度の学力向上施策の評価

本委員会では、平成 26 年度に長野県教育委員会が実施した、4 つの学力向上施策の評価と改善の方向について議論を行った。評価を行った施策は以下のとおりである。

- (1) 学力スパイラルアップ事業
- (2) 新たな家庭学習モデル創出事業
- (3) 学力向上にかかわる非常勤講師配置の取組
- (4) 「授業がもっとよくなる 3 観点」に基づいた教員の授業力向上に関する取組

ここでは、これらの現状・課題と改善の方向についてまとめる。

### (1) 学力スパイラルアップ事業の現状・課題と改善の方向

#### ①現状・課題

学力スパイラルアップ事業は、各学校における学力向上のための P D C A サイクルづくり※1を支援することにより、授業改善を進めることを目的とした事業である。事業の参加校は、県独自の学力調査（P 調査※2：4 月、小 5、中 1・2 C 調査※3：11 月、小 5、中 1・2）により学力実態を把握し、授業改善を進める。具体的には、P 調査によって明らかになった課題を、授業改善や補充指導により改善し、C 調査で改善の状況を確認し、不十分な場合はさらに指導を行う。また、5 月と 1 月に行う学力向上ミーティングで、各校の取組について情報交換を行い、自校の改善策に生かす。その際、補充・補完指導に、クリア問題・チャレンジ問題※4等を利用するなどして、各校は、確実に定着するまで指導する仕組みを構築する。P→D→C→A→P→D→…と繰り返しながら学力が高まっていく様子を、螺旋（らせん：スパイラル）のイメージでとらえ、螺旋を描くように学力が向上していくことを願い、スパイラルアップという名称をつけた。

※1：児童生徒の学力実態を把握して指導計画を立て（P[lan]）、計画に基づいて授業実践をし（D[o]）、実践による学力の定着状況を評価し（C[heck]）、その成果と課題を踏まえて指導計画の修正・改善をする（A[ction]）、学力向上のための一連の指導過程のこと。

※2、3：県教育委員会が作成する、学力実態を把握して授業改善につなげるための調査。P 調査は年度当初に実施し、前学年までの学習内容の定着を評価する問題。C 調査は年度中盤に実施し、現学年までの学習内容の定着状況を評価する問題。いずれも、全国学力・学習状況調査の問題を参考に、知識・技能に関する問題と活用に関する問題で構成。

※4：教育委員会が作成し、県総合教育センターホームページの「学びの広場」で提供している問題。クリア問題は知識・技能に関する問題、チャレンジ問題は活用に関する問題で構成し、国語（小 5・中 2）、算数・数学（小 4～中 3）、理科（小 5・中 2）、英語（中 3）の 4 教科で、現在計 408 枚の問題シートを提供。

平成 26 年度は、P、C 調査に全県の約 85%の学校が参加した（グラフ 25）。また、年 2 回の学力向上ミーティングを以下のように実施した。

第 1 回：5 月、県内 5 ヶ所で実施

ねらい P 調査から見える課題の共有と取組のための計画の立案及び学力向上に成果をあげている県外から講師を招聘し講演

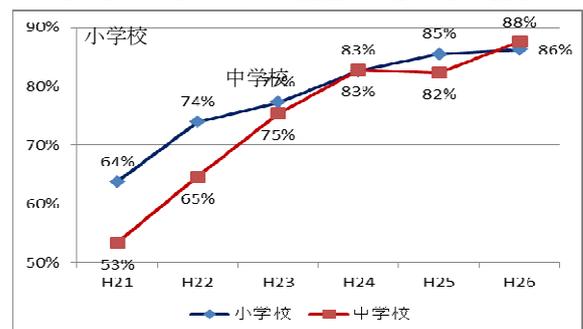
参加者 422 名（全調査参加校の 87.6%）

第 2 回：1 月、県内 5 ヶ所で実施

ねらい 取組の成果の共有

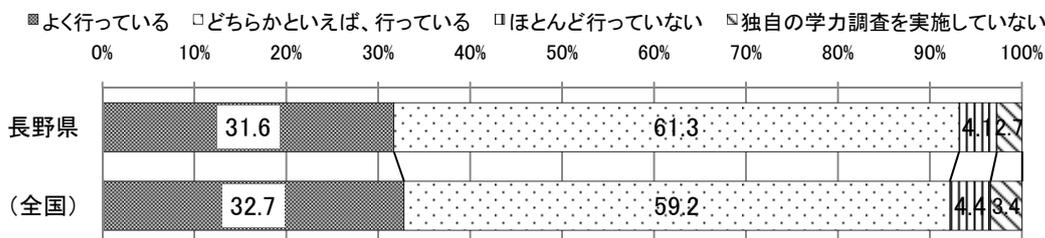
参加者 454 名（全調査参加校の 94.2%）

〔グラフ 25〕 P、C 調査への参加率の推移

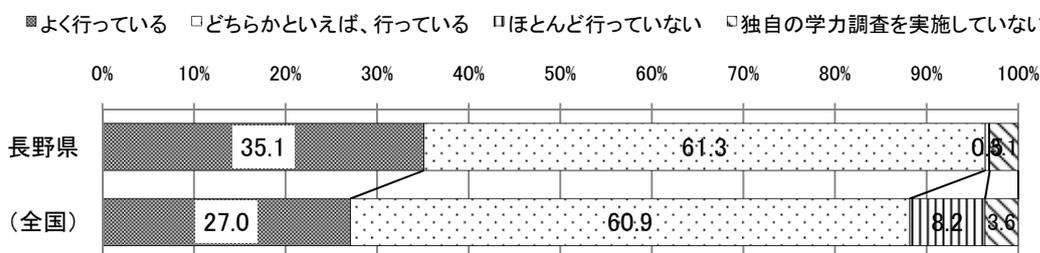


事業への参加率は上昇傾向にあるが、各校において学力向上のためのP D C Aサイクルが確立しているか、P D C Aサイクルの確立が学力向上の成果となって表れているかについては、必ずしも明らかではない。

〔グラフ 26〕 全国学力・学習状況調査の結果を地方公共団体における独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っている（小学校 学校質問紙）



〔グラフ 27〕 全国学力・学習状況調査の結果を地方公共団体における独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っている（中学校 学校質問紙）



グラフ 26、27 は、全国学力・学習状況調査の結果を県独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っている割合を示している。「よく行っている」と回答した割合は、小学校では全国平均を若干下回り、中学校では約 8 ポイント上回っている。中学校では全国と比べて高い割合を示しているものの、本委員会に 1 名の委員が参加した石川県では、中学校において「よく行っている」と回答した割合は約 60%である。石川県では、全国学力・学習状況調査の早期採点を受けて 1 サイクル、9 月の調査結果から 1 サイクル、その他の調査により 1 サイクルの年間 3 サイクルを回して学力向上の取組を進めている。また、学力向上と校内研究推進を関連させていることも特色である。本県においても、全国学力・学習状況調査の結果分析を組み込んだ改善サイクルを確立し、計画的・組織的な取組を進めていくことが必要である。

## ②県教育委員会に対する提言

### ➤ 各校が全人教育の理念を重視し、エビデンスに基づいた学力向上の取組を進めるよう支援する。

✚ 長野県教育が大切にしてきた全人教育の理念は、これからも重視すべきである。一方、特に学力に関して、全国学力・学習状況調査で得られる教科や生活についてのエビデンスに基づいた学力向上の取組を具体的に進めていくことが求められている。

✚ そのためには、4 月に実施した調査の結果を 8 月末に受け取ってから、授業や学習の改善が始まるのではなく、調査の実施直後に採点を行い、指導の成果と課題を明らかにし、校内で課題とその対策を共有することが必要である。特に、研究授業については、学校行事としてこなすことなく、日々の授業改善にいかに関わり付けるかという視点から全校体制で取り組むことが欠かせない。

例えば、全国学力・学習状況調査の早期採点、P、C調査、学力向上ミーティングなどを年間でどのように位置付け、改善のサイクルをどのように回すかについてモデルを示したり、全国学力・学習状況調査の分析結果を基に、校内の授業研究を進める組織と学力向上を進める組織が連携した取組が進むように支援したりすることが考えられる。

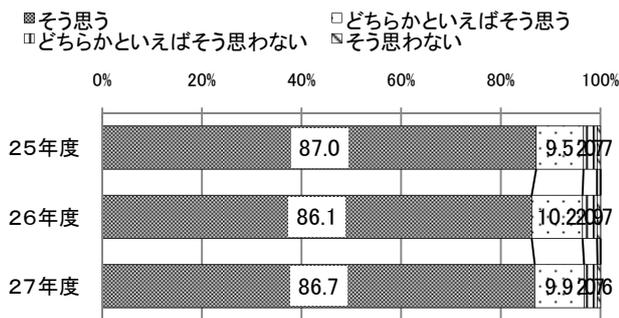
## (2) 新たな家庭学習モデル創出事業の現状・課題と改善の方向

### ①現状・課題

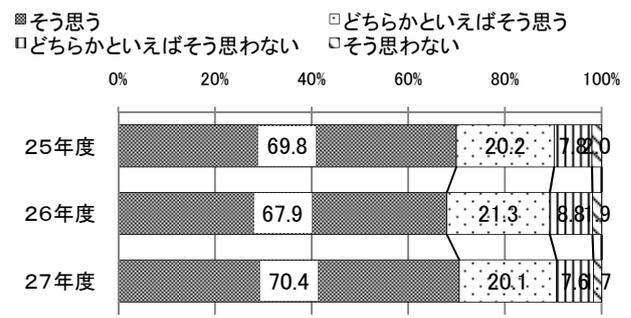
新たな家庭学習モデル創出事業は、本県固有の作業型の学習から授業と関連した内容や自分で見つけた課題に取り組む家庭学習への転換を図ることを目的とした事業である。具体的には、モデル校(2校)による家庭学習モデルの構築、シンポジウムや家庭学習通信等による研究成果の発信、PTA指導者研修会で、保護者の家庭学習へのかかわり方等を考え合う機会の設定などを行った。

グラフ 28、29 は、家で学校の宿題をしている状況を表している。

〔グラフ 28〕 家で学校の宿題をしている(長野県経年) <<小学校>>



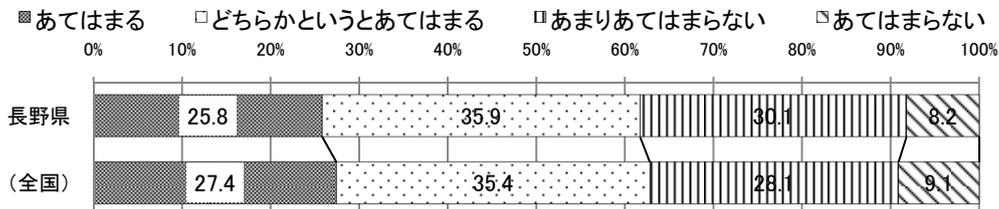
〔グラフ 29〕 家で学校の宿題をしている(長野県経年) <<中学校>>



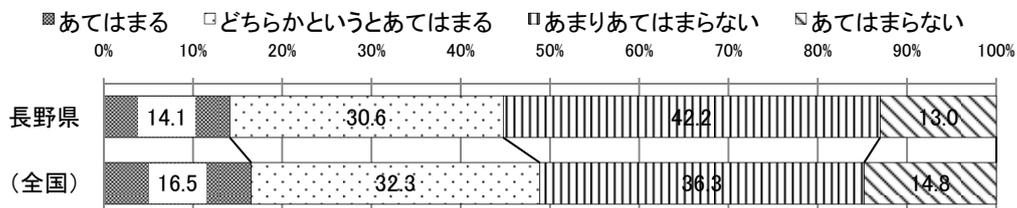
グラフ 28、29 から、家で宿題をしていると回答した割合は、平成 25 年度から、小中学校とも大きな変化は見られない。

グラフ 30、31 は、家で計画を立てて勉強している状況を表している。

〔グラフ 30〕 家で計画を立てて勉強している(長野県・全国) <<小学校>>

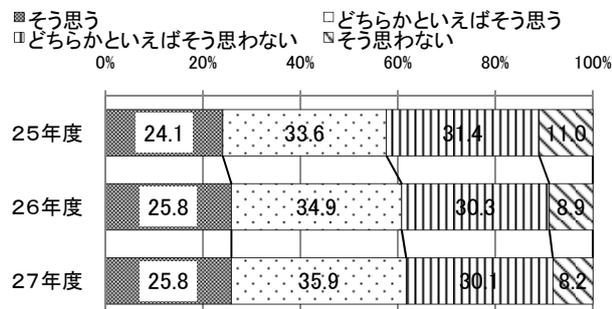


〔グラフ 31〕 家で計画を立てて勉強している(長野県・全国) <<中学校>>

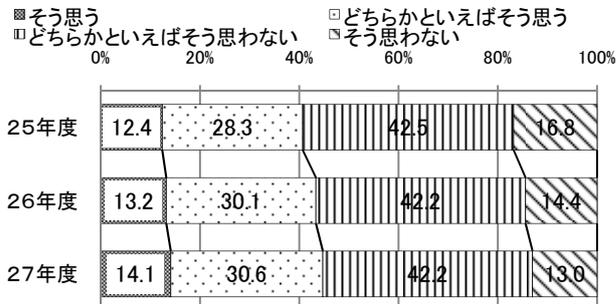


グラフ 30、31 から、家で計画を立てて勉強している割合は、「当てはまる」「どちらかという当てはまる」のいずれも、小中学校ともに全国より 2 ポイント程度低い。

〔グラフ 32〕 家で計画を立てて勉強をしている  
(長野県経年) 《小学校》



〔グラフ 33〕 家で計画を立てて勉強をしている  
(長野県経年) 《中学校》

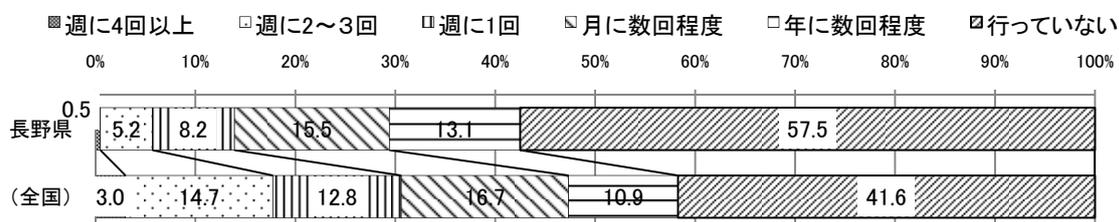


グラフ 32、33 から、経年変化をみると、家で計画を立てて勉強をしていると回答した割合は、小中学校とも平成 25 年から若干ではあるが増加傾向がみられる。本委員会では、本年度の調査は家庭学習モデル創出事業が 1 年目を終えた時点でのものであり、モデル校の取組が全県に広がるまでには至っていないものの、家庭学習の重要性については、学校、家庭、市町村教育委員会それぞれの認識が高まっているとの指摘があった。一方、教員によって宿題の出し方が違ったり保護者によっても受け止め方が異なったりするなどの実態があることも指摘された。授業で学習したことの確実な定着を図る家庭学習について、さらに研究を深め、各校での取組が進むよう支援していくことが必要である。その際、授業を充実させることが家庭での学習の充実につながるという視点を大事にし、モデル校の実践を発信し県内で共有できる体制を整えることが重要である。

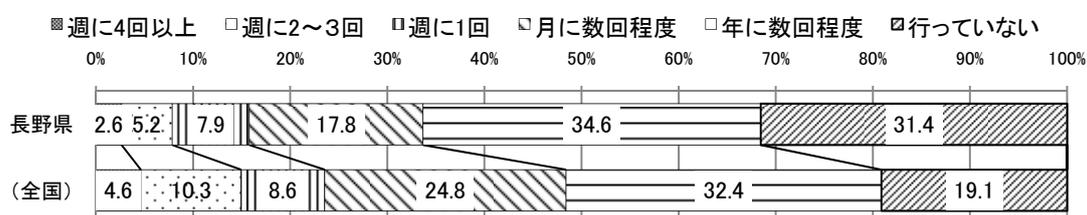
家庭学習の充実に関しては、市町村教育委員会で独自の取組を進めているところが増えてきているが、育むべき学力に向けて的確な成果を上げるためには、県教育委員会と市町村教育委員会が連携し、同じ方向で取組を進めることが重要であるとともに、現場の教員に過度な負担にならないような配慮も必要である。

本委員会では、家庭学習とともに、放課後や長期休業における補充指導についても議論した。

〔グラフ 34〕 放課後を利用した補充的な学習サポートを実施した(学校質問紙 長野県・全国) 《小学校》

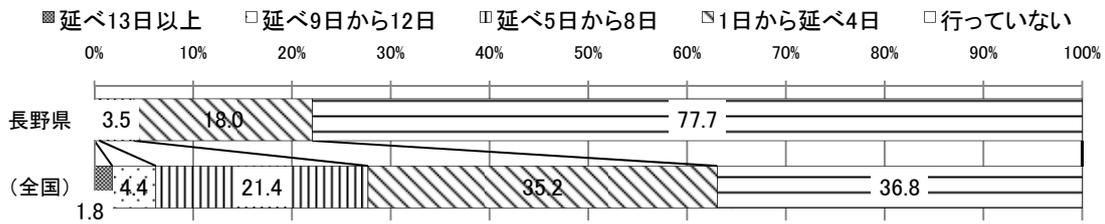


〔グラフ 35〕 放課後を利用した補充的な学習サポートを実施した(学校質問紙 長野県・全国) 《中学校》

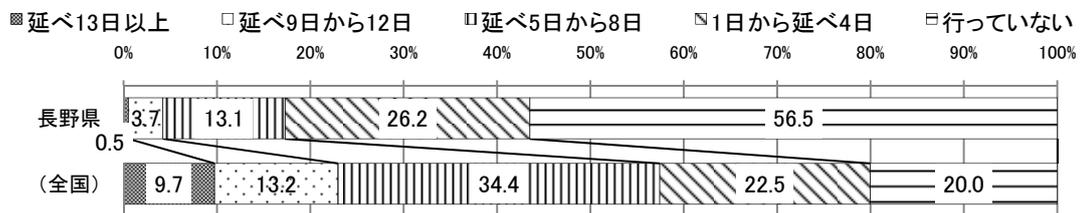


グラフ 34、35 から、放課後を利用した補足的な学習サポートを実施していない割合は、小中学校ともに全国より高い。

〔グラフ 36〕 長期休業を利用した補足的な学習サポートを実施した（学校質問紙 長野県・全国）《小学校》



〔グラフ 37〕 長期休業を利用した補足的な学習サポートを実施した（学校質問紙 長野県・全国）《中学校》



グラフ 36、37 から、長期休業を利用した補足的な学習サポートを実施していない割合は、小中学校ともに全国より高い。長期休業における補充指導に関しては、授業日数等との関係も考慮する必要があるとの指摘も出された。

## ② 県教育委員会に対する提言

➤ **学習したことの確実な定着を図る家庭学習についての情報発信を一層充実し、各校の取組が進むよう支援する。**

- 例えば、授業とのつながりが明確な家庭学習の工夫例や、自ら課題を見だし取り組む自立的な家庭学習の取組例などを紹介したり、市町村や中学校区における情報共有の仕組みを整えたりする。
- 短い時間を単位として繰り返し教科指導を行う短時間学習（帯学習、モジュール学習）の検討を進めるとともに、放課後や長期休業中の補充指導の取組を進めたい。

## (3) 学力向上にかかわる非常勤講師配置の取組の現状・課題と改善の方向

### ① 現状・課題

学力向上にかかわる非常勤講師配置の取組は、学力向上についての明確な改善策を策定し、仕組みを作ろうとしている学校に対して、非常勤講師を配置し、県教育委員会が支援するものである。主な支援の内容は次の3点である。

- a) 訪問や電話相談による学力向上のための仕組みづくりに対する助言
- b) 配置教員を生かした具体的な取組についての情報の収集と提供
- c) 各種問題や教材等の作成に対する支援

平成 26 年度は、22 校（小学校 2 校、中学校 20 校）に非常勤講師が配置された。

非常勤講師が担当する教科や業務は、各学校の課題に応じたものであり、内容は多様である。そのため、必ずしもすぐに教科調査の結果に反映されるとは限らない。取組の成果を測る指標として、児童生徒の意識の変容を、児童生徒質問紙の回答状況から読み取ることができる。

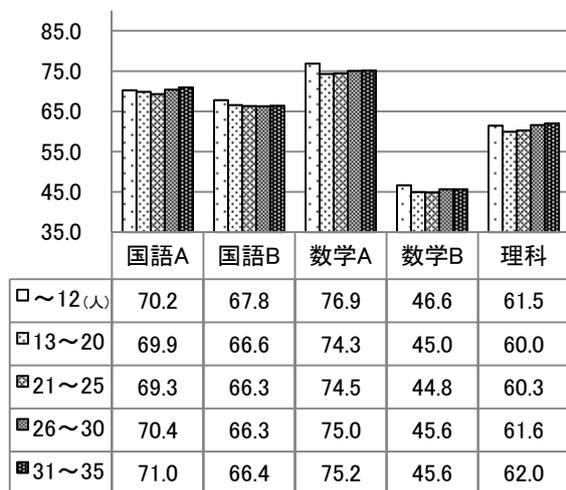
例えば、飯田市立緑ヶ丘中学校では、非常勤講師の配置により、研究主任の授業時数を減らし、その分を授業参観や授業づくりの支援に充てることを可能にした。具体的には、授業の進め方（課題設定・めりはりのある展開・まとめ）について、研究主任が授業者と意見を交換した。その結果、「授業のはじめに目標が示されていると思う」や、「授業で発表する機会があると思う」と回答した生徒の割合が大きく伸びている。また、須坂市立東中学校では、加配教員が数学の授業に T T として参加し、きめ細かい指導を行った。その結果、「数学の授業内容はよく分かる」と回答した生徒の割合が増加した。伊那市立春富中学校では、加配教員が、各教科の家庭学習で扱うプリントを印刷・配布した。その結果、「家で学校の宿題をしている」と回答した生徒の割合が増加した。

これらの例は、各学校が自校の課題を明確にした上で、加配教員を生かして校内体制を整えて進めた取組ではあるが、学力向上に向けて多くの学校が参考にできるものである。

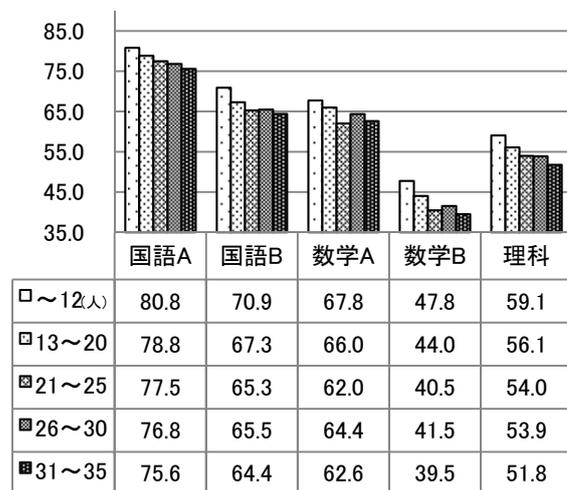
県教育委員会は、加配校の取組の内容や成果を、多くの学校が共有し、自校の取組に生かすことができるような体制を整える必要がある。（なお、加配校の取組の詳細については、次節「3 事例：学力向上のための学校による取組」を参照）

本委員会では、学級規模と正答率の関係についても分析を行った。グラフ 38、39 は、1 学級当たりの児童生徒数と全国学力・学習状況調査の正答率の関係を表している。

〔グラフ 38〕 1 学級当たりの児童数と正答率の関係  
（平成 27 年度 小学校）



〔グラフ 39〕 1 学級当たりの生徒数と正答率の関係  
（平成 27 年度 中学校）



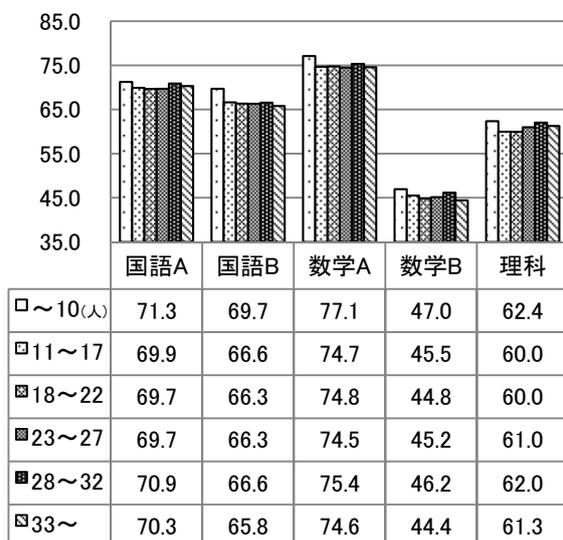
グラフ 38 から、小学校では、1 学級当たりの児童数と正答率の関係に顕著な傾向は見られない。

グラフ 39 から、中学校では、どの教科も、1 学級当たりの生徒数が 12 人以下の正答率が最も高く、31 人～35 人の正答率が最も低い。

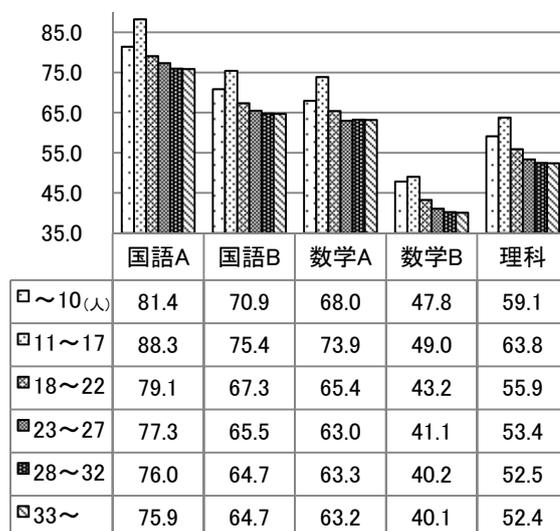
中学校は、全体として 1 学級当たりの生徒数が少ない方が正答率が高い傾向があるが、国語 B、数学 A、数学 B では、26 人～30 人の方が 21 人～25 人よりも正答率が高い。

本県では、30人規模学級編制を行っており、1学級の人数が35人を超えると2学級に分けることができる。そこで、18人を区切りにして作成したグラフが、**グラフ40**、**41**である。

〔グラフ40〕 1学級当たりの児童数と正答率の関係  
(平成27年度 小学校)



〔グラフ41〕 1学級当たりの生徒数と正答率の関係  
(平成27年度 中学校)



小学校では、区切り方を変えても、1学級当たりの児童数と正答率の関係について、**グラフ38**と大きな違いはみられない。一方、中学校では、どの教科も、1学級当たりの人数が11人~17人の正答率が最も高い。

30人規模学級編制の効果についての検証が必要であるが、学級規模による教育の効果については、正答率だけで論じきれない面があり、不適応対応やインクルーシブシステムの構築など、その効果を多面的に捉えることが重要である。本県が全国に先駆けて実施している少人数教育を有効に活用し、加配教員の活用の仕方や効果的な指導法について、さらに工夫することが必要である。具体的には、加配教員を有効に生かすために、指導主事による学校訪問や教員の戦略的な配置を積極的に講じることなどが考えられる。

## ②県教育委員会に対する提言

➤ **学校の実態に応じて教員の加配を行うとともに、加配校に対して学校訪問などによる継続的な支援を充実する。**

- 教員の加配は、学力向上に向けた熱心な取組、特色ある取組、独自の取組などを計画している市町村や学校に対して重点化すべきである。
- 学力向上にかかわる加配校については、県の責任として指導主事の学校訪問などを実施し、授業力向上への指導を充実することが大切である。
- 教員の加配に際しては、学力向上の基盤となる学級づくりや不登校対応などに対して支援することも検討する必要がある。
- 本県では、全国に先駆けて少人数教育を推進してきている。30人規模学級編制や少人数学習集団編成などに必要な教員を配置する信州少人数教育推進事業についても、学力面、生徒指導面など、多面的な検証が必要である。

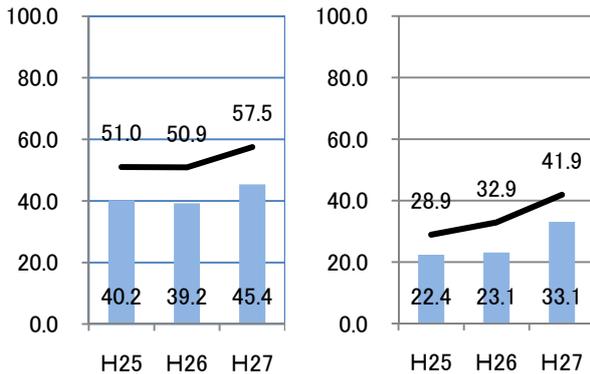
(4) 「授業がもっとよくなる3観点」を基にした授業力向上の取組の現状・課題と改善の方向

①現状・課題

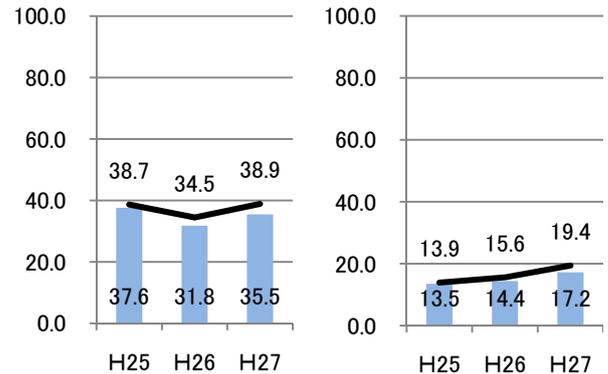
県教育委員会は、日々の授業を充実するための学習指導の改善の要点として、平成21年度から「授業がもっとよくなる3観点」を示して授業改善を進めてきた。3観点は「ねらい（つける力）を明確にすること、授業の流れにめりはりをつけること、ねらいの達成を見とどけること」である。

グラフ42～44は、「授業がもっとよくなる3観点」にかかわる児童生徒質問紙の回答状況である。

〔グラフ42〕 授業のはじめに目標が示されていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）

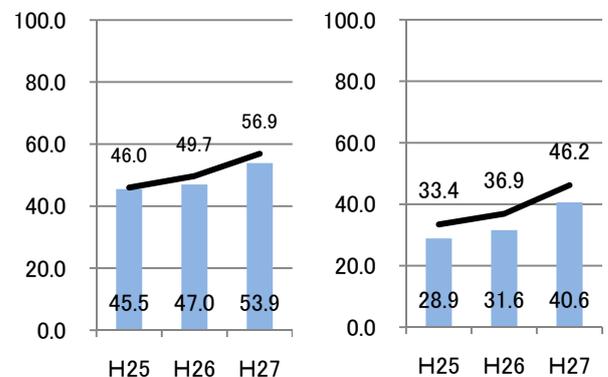


〔グラフ43〕 授業の最後に振り返る活動が行われていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）



3観点にかかわる質問紙の回答状況は、いずれも全国平均よりも低いものの、増加傾向が見られることから、この取組に関しては一定の成果が上がっているとみることができる。実際の授業に関して本委員会では、「見とどけの中身についての理解が十分でなく、指導の仕方に差が見られる」、「見とどけについて、質の充実とともに次へのつながりという視点でさらに踏み込んでいく必要がある」といった指摘が出された。3観点で示されていることは、授業を進める上での観点であり、授業をよりよくしていくためには、ねらい、めりはり、見とどけの質を向上させることが重要である。例えば、見とどけの充実にかかわって、振り返りの質を高めるために、本時で振り返ることを授業の計画段階で明確に書き出し、そのために必要な発問や板書の計画を入念に検討することなどが必要である。

〔グラフ44〕 授業で自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）



授業改善については、多くの小学校では授業の基本形が整っているように感じられる。一方、中学校では教員任せになり、授業改善が進まない現状もある。改善に向けては、例えば、次のようなことも考えられる。

- ・授業改善策の実感を伴う提案

授業力の高い教員の授業参観などを通して、指導法のより具体的なイメージや方法を明確に伝える。その際、実際の授業映像のビデオコンテンツなどを利用すること。

- ・悉皆研修としての教育課程研究協議会の改善

全国学力・学習状況調査の結果を基にした授業改善について研究会を行う。

午後の研究協議会において、教科ごとの課題を解決するための研修とともに、「情報に関連付けて自分の考えを説明する」ことや「構想を立てて説明する」ことなど、どの教科でも改善が必要な長野県の課題を克服するための研修を行う。

- ・各種同好会（研究会：信州理科教育研究会など）と連携した取組の推進

「子どもたちの学力を向上させたい」という願いを共有して、学力に関する同僚性を高め、授業改善、各種定着問題の作成、テスト問題の作成などを行う。

指導改善の取組については、県教育委員会や市町村教育委員会の思いが一人一人の教員に届くようにすることが重要である。「授業がもっとよくなる3観点」の定着は学校現場で進んできているが、さらに推進するためには、県教育委員会、市町村教育委員会が指導の方向を揃えることが必要である。その際、指導主事の学校訪問についても、課題を抱える学校への継続的な訪問、教材研究にかかわる内容の一層の充実など、支援のあり方を検討していくことが重要である。

## ②県教育委員会に対する提言

- 「授業がもっとよくなる3観点」を生かした授業改善の取組をさらに推進する。

- ねらい、めりはり、見とどけの質の向上を図る。例えば、ICTやホワイトボードの活用による協働的な学習の充実、個に応じた補充・発展問題による見とどけの充実などを、具体的に推進する。
- 効果的な取組事例の紹介を行う。その際、取組とその成果について、生徒の意識の変容についても継続的に捉えることが重要である。
- 悉皆研修としての教育課程研究協議会を有効に活用し、県内の教員が課題を共有し、解決していく仕組みを作る。
- 指導主事の学校訪問については、効果的な支援となるよう、方法と内容の両面で検討を進める。

## (5) 市町村教育委員会、保護者、地域との連携：学力向上に向けた取組の一層の推進

### ①現状・課題

県教育委員会の学力向上の施策や取組は、学校を対象としたものが多く、市町村教育委員会や保護者に対しての取組は十分でない（p. 25 図 24）。ここまでに取り上げた施策や取組についての項でも述べたように、県教育委員会は市町村教育委員会や保護者と連携して取り組むことが重要である。

### ②県教育委員会に対する提言

- 市町村教育委員会、保護者、地域と学力の状況などの情報を共有し、連携して学力向上の取組を一層進める。
  - 特に、市町村教育委員会と課題を共有し、取組を進める方向を同じにすることが必要である。
  - 基本的な生活習慣の確立や学ぶ意欲の醸成について、保護者や地域と連携した取組を進めることも必要である。

### 3 事例：学力向上のための学校による取組

#### (1) 平成 26 年度 学力向上にかかわる非常勤講師配置校の取組

非常勤講師配置校では、加配教員を活用し、独自の学力向上策を進めた。そのうちのいくつかの学校を取り上げ、取組と児童生徒の意識の変容を紹介する。意識の変容は、質問に「当てはまる」と回答した割合で示している。

(○：学校としての取組 ◎主として加配教員が担った役割)

■ 学校      - - - 長野県      — 全国

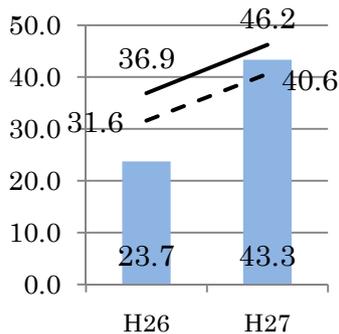
#### 1) 佐久市立中込中学校

##### ① 学力向上のための取組

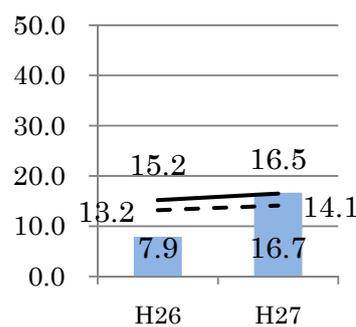
- 研究主任が授業改善の方向を示し、考えたり発表したりする時間を授業に位置付けた。
- ◎クリア・チャレンジ問題を印刷して専用棚に常備し、教科担任が授業の中で計画的に扱ったり、家庭学習として取り組ませたりした。
- ◎ノー部活デーやテスト前部活なしの放課後、1時間の学習相談を各学年12回実施した。

##### ② 生徒の意識の変容

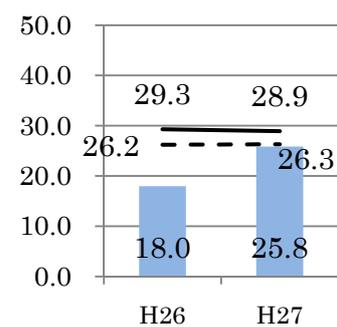
授業で自分の考えを発表する機会が与えられていた



家で、自分で計画して勉強している



数学の勉強は好き



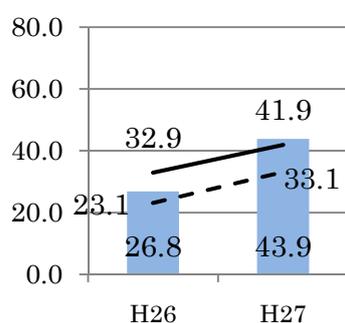
#### 2) 上田市立塩田中学校

##### ① 学力向上のための取組

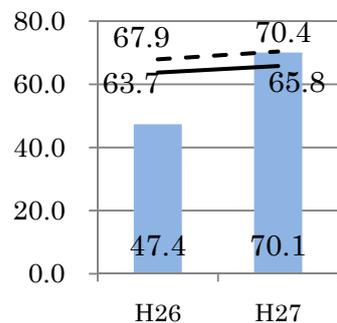
- 研究主任が先頭に立ち、「授業がもっとよくなる3観点」を踏まえた授業のスタイルを確立するよう努めた。
- ◎クリア・チャレンジ問題の専門棚を設置し、子どものニーズに応える家庭学習用プリントを用意した。
- ◎数学の授業のTTに入り、学習に困っている生徒の支援を行った。

##### ② 生徒の意識の変容

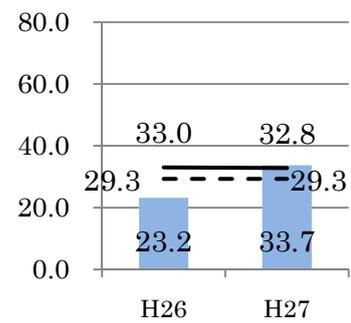
授業のはじめに目標が示されていた



家で、学校の宿題をしている



数学の授業内容はよく分かる



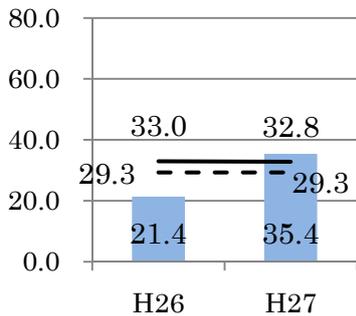
### 3) 伊那市立春富中学校

#### ① 学力向上のための取組

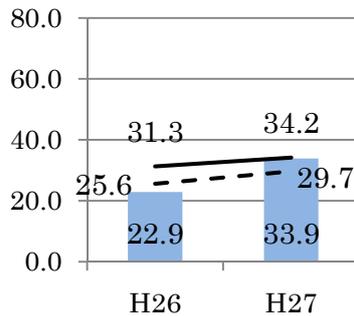
- 非常勤講師（数学科）により授業時数が軽減された教科主任が、他の教員、特に経験の少ない若い教員の授業を参観し、授業づくりに対する支援を行い、授業力の向上を図った。（週1～2回）
- 家庭学習の内容を授業と関連するものにした。
- ◎家庭学習で扱うプリントの印刷、配付等を中心となって行った。（各教科、週に1～2回程度）

#### ② 生徒の意識の変容

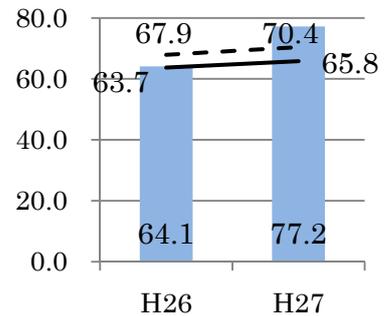
数学の授業内容はよく分かる



授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていた



家で、学校の宿題をしている



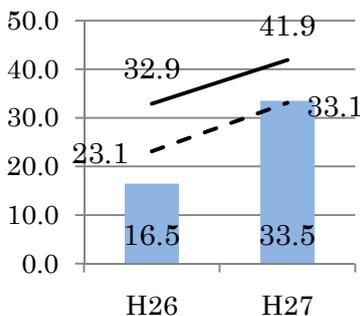
### 4) 飯田市立緑ヶ丘中学校

#### ① 学力向上のための取組

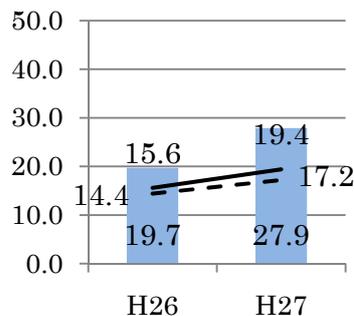
- 学力向上グループの主任が、教科を問わず授業を参観し、「授業がもっとよくなる3観点」を基に授業者と直接意見交換をして、授業力向上を図った。
- ◎非常勤講師（英語）が3年生2クラスの授業を受け持ち、主任の業務推進の時間を確保した。

#### ② 生徒の意識の変容

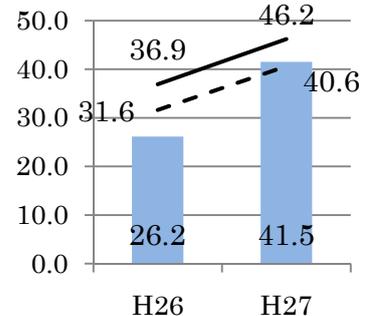
授業のはじめに目標が示されていた



授業の最後に学習を振り返る活動をよく行っていた



授業で自分の考えを発表する機会が与えられていた



## 5) 松本市立清水中学校

### ① 学力向上のための取組

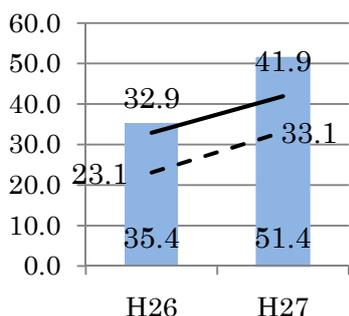
○授業改善について（目標の明示、話し合い活動、振り返り）の数値目標を設定し、生徒アンケートによる評価を実施して、結果を改善に生かした。

◎数学の授業でのTT指導で、理解の遅い生徒への学習支援を行った。

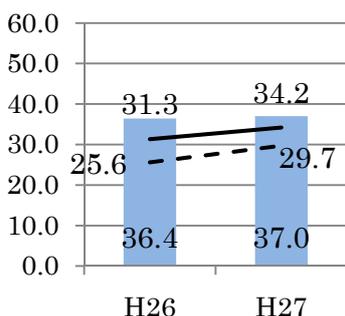
◎補充・補完指導用のプリントの作成と点検及び昼休み、放課後の補充指導を行った。

### ② 生徒の意識の変容

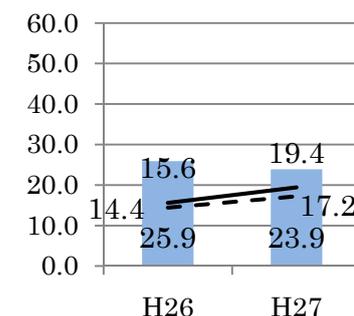
授業のはじめに目標が示されていた



授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていた



授業の最後に学習を振り返る活動をよく行っていた



## 6) 安曇野市立穂高西中学校

### ① 学力向上のための取組

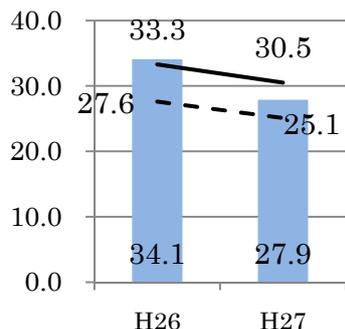
○校内研究では、授業改善として、全ての教科で「理由・根拠」を明確にして書いたり話したりすることに力を入れた。

◎新聞を利用して国語の家庭学習用課題を作成したり、点検・評価を行ったりした。

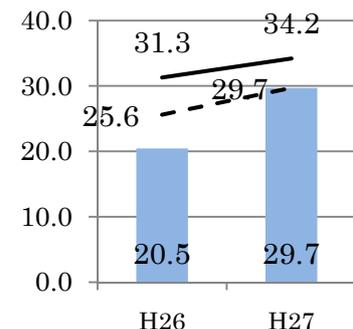
◎週1回放課後に、1年生を対象とした数学の補習学習を実施した。

### ② 生徒の意識の変容

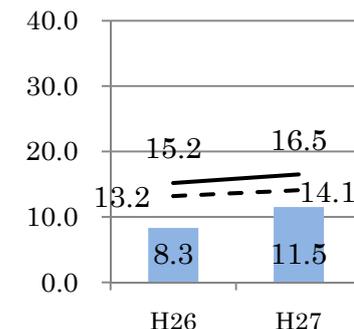
自分の考えを他人に説明したり文章に書いたりすることは難しい



授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていた



家で、自分で計画して勉強している



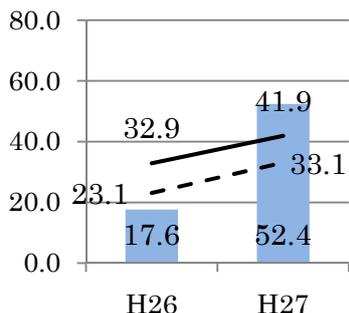
## 7) 須坂市立東中学校

### ① 学力向上のための取組

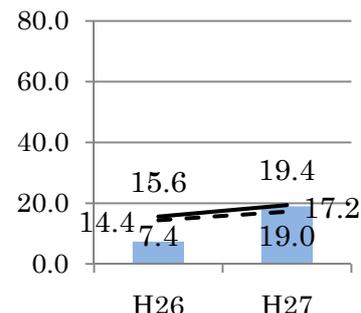
- 教科担任と加配教員は「授業がもっとよくなる3観点」を踏まえて授業改善を進めた。
- 家庭学習の内容を授業と関連するものにした。
- ◎数学の授業にTTとして参加し、個に応じたきめ細かい指導を実施した。

### ② 生徒の意識の変容

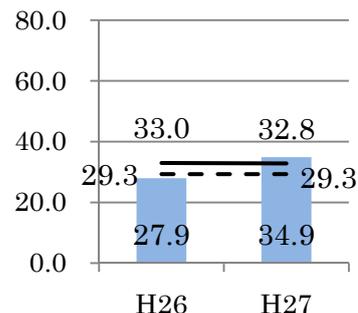
授業のはじめに目標が示されていた



授業の最後に学習を振り返る活動をよく行っていた



数学の授業内容はよく分かる



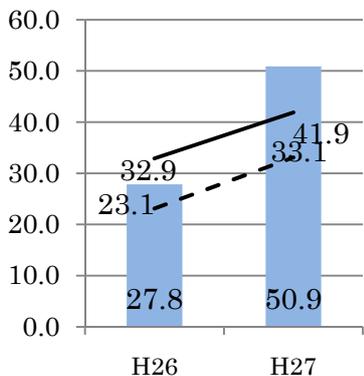
## 8) 飯山市立城南中学校

### ① 学力向上のための取組

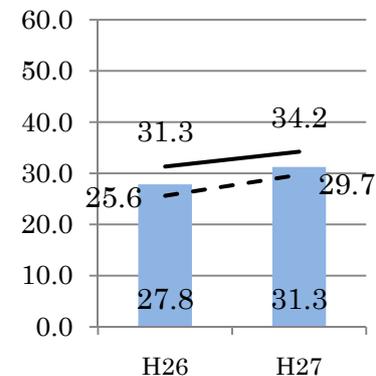
- 「授業がもっとよくなる3観点」を大切にして、「授業のまとめ」から授業を構想した。
- 家庭学習の取組の良いものを表彰した。
- ◎授業用の教材を作成し、教科で共有して使用できる環境を整えた。
- ◎生徒の実態に合わせて補充指導と提出物の添削を実施した。

### ② 生徒の意識の変容

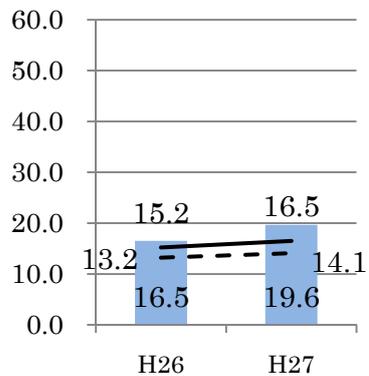
授業のはじめに目標が示されていた



授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていた



家で、自分で計画して勉強している



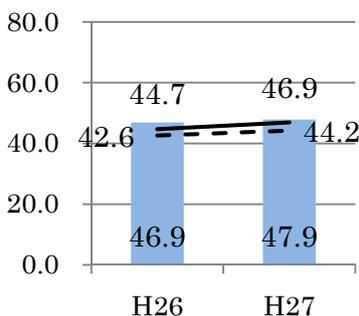
9) 伊那市立伊那北小学校

① 学力向上のための取組

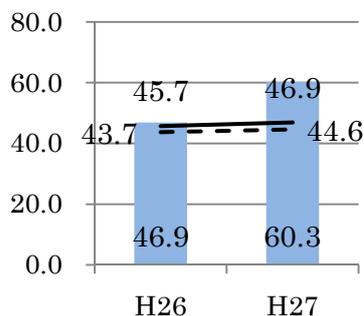
- 6年は少人数学習加配教員と連携し、習熟度別コースでT Tを実施した。
- ◎ 学習室「チャレンジルーム」を設置して、非常勤講師がいつでも質問を受けたり、不得意な分野の復習に対応したりできるようにした。
- ◎ 3年はT Tとし、週1時間各クラスで行った。また、4、5年は、習熟度別の指導を行い、理解が不十分な児童の授業を週4時間担当した。

② 生徒の意識の変容

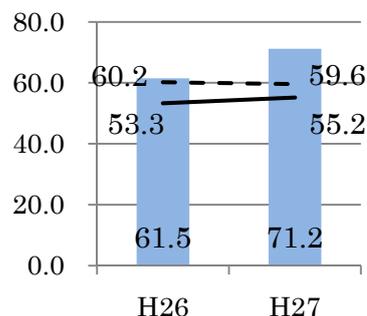
算数の授業はよく分かる



算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える



算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている



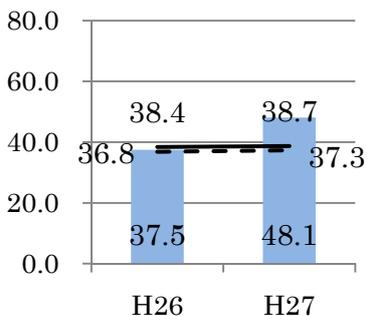
10) 飯田市立竜丘小学校

① 学力向上のための取組

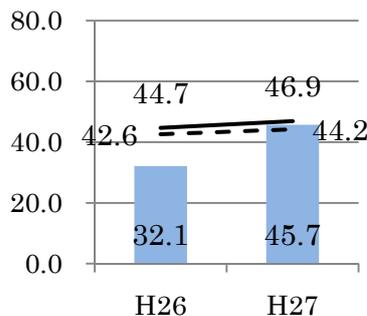
- 県総合教育センターのクリア問題を実施し、児童の実態把握を行った。
- ◎ 単元ごとの成果と課題を明らかにして、学級担任と検討し、次単元の指導に生かすよう努めた。
- ◎ 5、6年に対して、4月はT Tとして児童の実態把握を進め、5月から少人数での指導を行った。

② 生徒の意識の変容

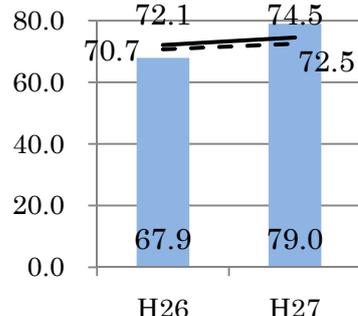
算数の勉強が好き



算数の授業はよく分かる



算数の勉強は大切だと思う



## (2) 学力向上にかかわる特徴的な取組

平成 25 年度、26 年度の分析委員会では、中学校の授業改善について次の提言が行われている。

- ・ 知識・技能の確実な定着を図る。
- ・ 3 観点を重視した授業改善の充実を図る。
- ・ 総合的な学習の時間における探究的な活動を充実させる。

これらの提言に対し、学力向上に向けて特徴的な取組を進めている学校が多く見られるようになってきている。特に、「授業がもっとよくなる 3 観点」を重視した授業改善や総合的な学習の時間に関する特徴的な取組と、生徒の意識の変容について紹介する。

■ 学校      - - - 長野県      — 全国

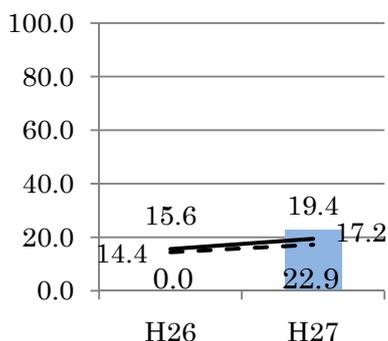
### 1) 東御市立北御牧中学校

#### ① 特徴的な取組

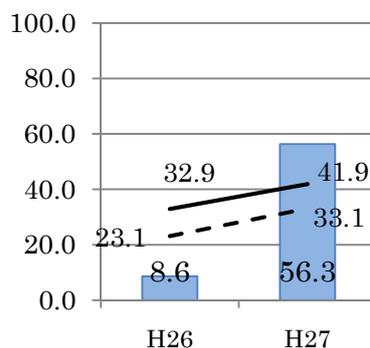
- 振り返りの場面で、「何を学んだか」をまとめとして書くことに全教科で取り組んだ。そのために、授業のねらいを明確にした。
- 総合的な学習の時間では、全校縦割のキャリア学習を位置付け、様々な職種の専門家のサポートをもとに、体験的な学習に取り組んだ。

#### ② 生徒の意識の変容

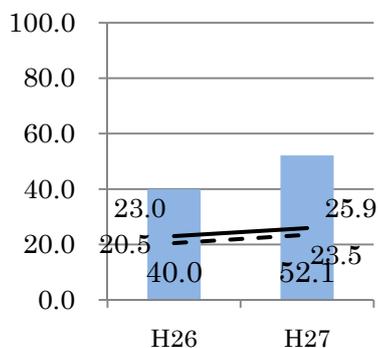
授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている



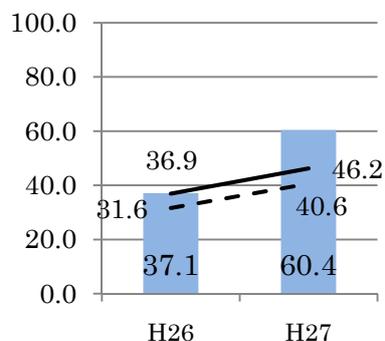
授業のはじめに目標が示されている



「総合的な学習の時間」で学習したことは普段の生活や社会に出たときに役に立つと思う



授業で自分の考えを発表する機会が与えられている



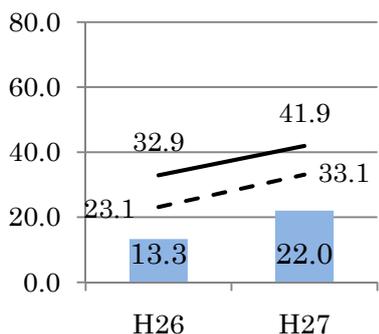
## 2) 上田市立真田中学校

### ① 特徴的な取組

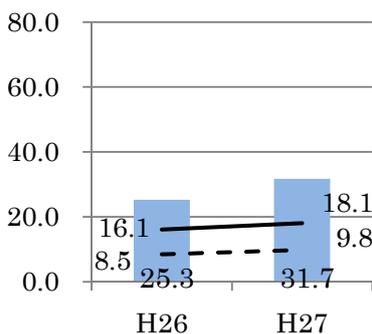
- 授業にかかわる生徒アンケートを実施し、校内で評価・改善のサイクルを回しながら全職員で「授業がもっとよくなる3観点」を大切に授業改善に取り組んだ。
- 総合的な学習の時間は、食育・健康教育を中心テーマとし、学年ごとに取り組み、指導に当たっては、考えを発表する時間を確保し、教員も丁寧に対応した。

### ② 生徒の意識の変容

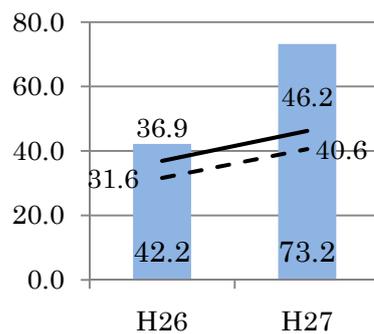
授業のはじめに目標が示されている



総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動をした



授業で自分の考えを発表する機会が与えられている



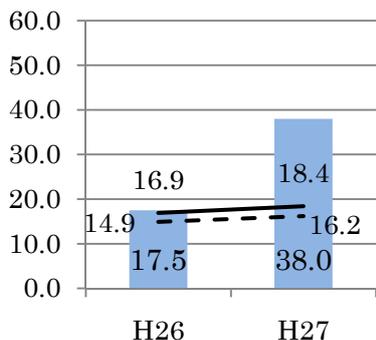
## 3) 大町市立第一中学校

### ① 特徴的な取組

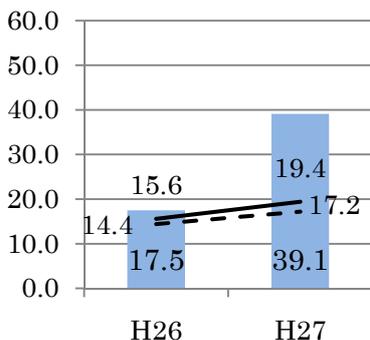
- 対話活動に着目した授業改善（協同の学び）を全教科で実施した。
- 振り返りの場面で友や教員との対話を取り入れ、1時間の学びについて語り合い、学びの意味化を図った。
- 総合的な学習の時間では、キャリア教育を柱に、課題追究のサイクルを意識したカリキュラムを編成した。

### ② 生徒の意識の変容

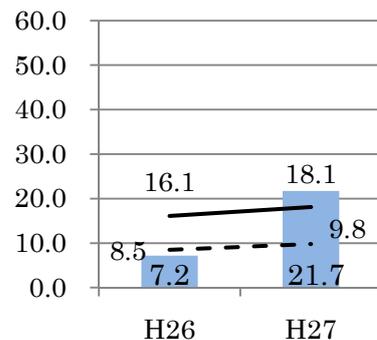
話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりできた



授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行った



総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動をした



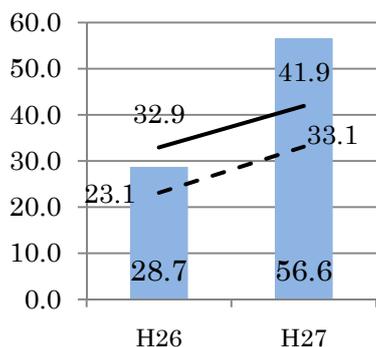
#### 4) 飯綱町立飯綱中学校

##### ① 特徴的な取組

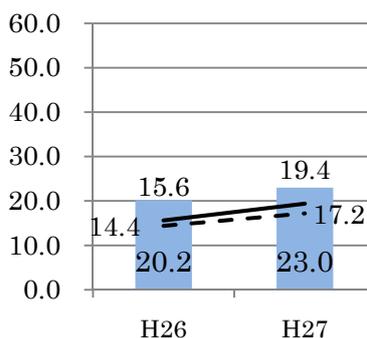
- 全教科で、授業の終末に学習問題に照らして自分の言葉でまとめる活動を実施した。
- 追究の段階でグループ活動を位置付け、発表や話し合いを充実させた。
- キャリア教育と地域学習を融合させ、3年間のゴールを明確にした総合的な学習の時間のカリキュラムを編成した。

##### ② 生徒の意識の変容

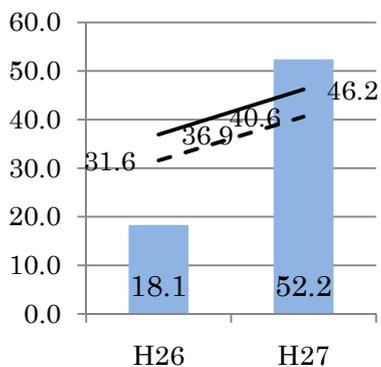
授業のはじめに目標が示されている



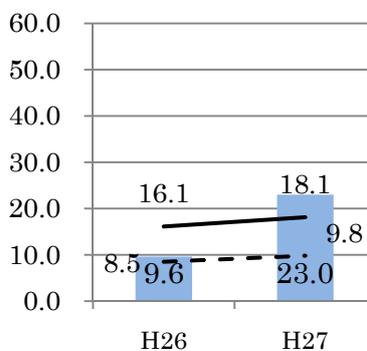
授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行った



授業で自分の考えを発表する機会が与えられている



総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの活動をした



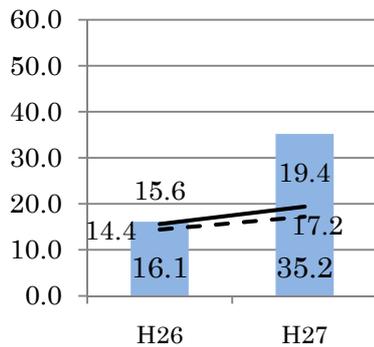
## 5) 小布施町立小布施中学校

### ① 特徴的な取組

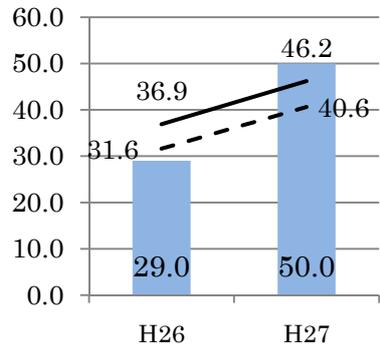
- 1時間の授業で、必ず振り返りを位置付けた。
- 地域への提言をゴールとした総合的な学習の時間のカリキュラムを編成し、まとめや発信に関して、丁寧な指導を心がけた。
- 各教室にプロジェクターを設置し、積極的にICT機器を活用した。

### ② 生徒の意識の変容

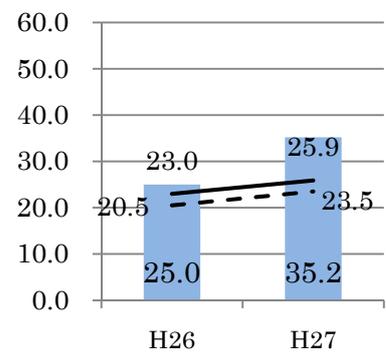
授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行った



授業で自分の考えを発表する機会が与えられている



「総合的な学習の時間」で学習したことは普段の生活や社会に出たときに役に立つ



## IV これからの時代に対応した学習指導

### 1 「子どもと共に創る授業※<sup>1</sup>」の実現に向けた具体的な支援の充実：質の高い深い学びの実現

新しい学習指導要領等の在り方について議論が進んでいる※<sup>2</sup>。そこでは、「何を知っているか、何ができるか」「知っていること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」を柱に、育成すべき資質・能力について検討されている。既に、「育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが「どのように学ぶか」についても光を当てる必要があるとの認識のもと」（『教育課程企画特別部会 論点整理』（2015.8.26, p.17）、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の重要性が指摘されている。具体的には、「問題発見・解決を念頭に置いた深い学び」「自らの考えを広げ深める対話的な学び」「学習活動を振り返って次につなげる主体的な学び」が実現されるよう指導することが必要であるとされている。

新しい学習指導要領については今後も検討が進められていくため、長野県としては、国の動向を注視しつつ、本県としての対応を慎重かつ入念に実現していくとともに、県教育委員会のみならず、市町村教育委員会や各学校において教員の研修を弛まなく計画・実施・充実していく必要がある。

教育に関する国のこうした方向性について、本委員会では、「新しい時代に求められている資質・能力を育み、質の高い深い学びを実現する指導は、長野県がこれまで重視してきた「子どもと共に創る授業」に他ならない」、「これまで大事にしてきたものにもう一度光を当てるべきである」、「教員には子どもができるようになった・分かるようになったことの喜びを一層大切にしてほしい」、などの指摘がされた。

なお、高大接続システム改革会議では、今後導入が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」についても検討が進められている※<sup>3</sup>。現在の中学校1年生からこのテストの対象になることから、対応を早めにしていくことが重要である。そのためには、本県においても、小学校、中学校、高等学校の学力観をすり合わせ一貫性のあるものに整えていくことが欠かせない。

県教育委員会に対する提言

➤ 国の動向を注視しつつ、本県がこれまで重視してきた「子どもと共に創る授業」の実現に向けた具体的な支援を進める。

📌 指導法の研究に加え教材研究を充実し、「子どもと共に創る授業」づくりが推進されるよう校内研修を支援する。

📌 「アクティブ・ラーニング」などの新たな学びに関する教員の資質・能力向上のための教員研修を進める。

※<sup>1</sup>：子どもが本来もっている「知りたい」「やってみたい」「伸びたい」という知的好奇心に根ざし、子どもの意識の流れを大事にし、一人一人が主体的に追究して学習内容を確実に身に付けていく授業。長野県教育委員会 教学指導課が発行する「教育課程編成・学習指導の基本」（青本）の中で、目指す授業として位置付けている。

※<sup>2</sup>：教育課程企画特別部会 論点整理

※<sup>3</sup>：高大接続システム改革会議「中間まとめ」

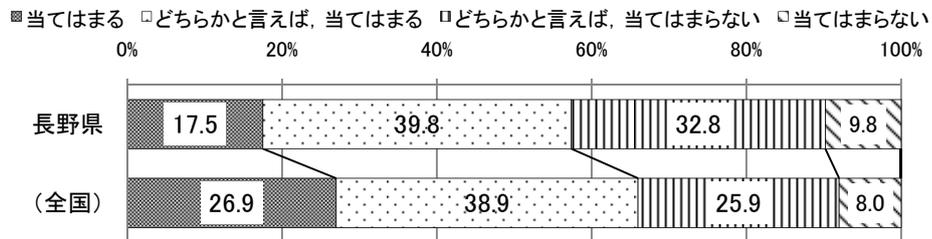
### 2 総合的な学習の時間における、探究的な学びのさらなる充実を促す支援の促進

総合的な学習の時間については、平成26年度分析委員会の提言においても、自分で課題を立て情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの探究的な学習の充実を求めている。本委員会の議

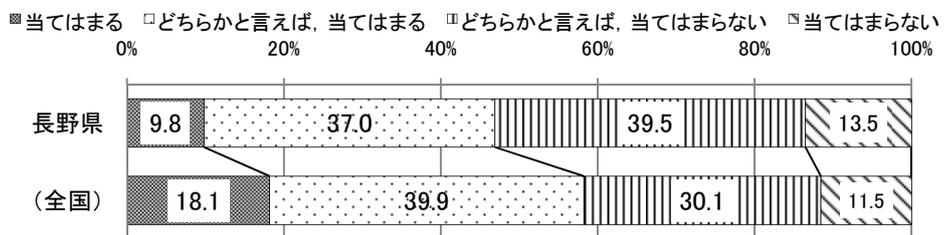
論においても、教科等の学習を総合的に活用する場として総合的な学習の時間を大切にすべきであるとの指摘がなされた。

グラフ 45、46 は、総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理し、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいる状況である。

〔グラフ 45〕 総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動の状況（小学校児童質問紙）



〔グラフ 46〕 総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動の状況（中学校生徒質問紙）



肯定的な回答をした割合は、本県小学校では全国よりも 8.5 ポイント低く、中学校では 11.2% ポイント低い。

表 7 は、総合的な学習の時間に探究的な活動を行うために工夫していることの状況である。課題のを見つけ方や作り方について、小学校では 92.1%、中学校では 81.3% の学校で工夫している。情報分類・整理・まとめの仕方についても小中学校共に 86% を超える学校で工夫している状況である。

〔表 7〕 総合的な学習の時間に、探究的な活動を行うために工夫していること（平成 27 年度学校経営概要）

| 形態         | 課題のを見つけ方や作り方 | 情報の集め方や調べ方 | 人との関わりや体験の仕方 | 情報分類・整理・まとめの仕方 | 報告や発表の仕方 | 自己評価の仕方 |
|------------|--------------|------------|--------------|----------------|----------|---------|
| 小学校〔367 校〕 | 338          | 336        | 365          | 319            | 347      | 275     |
| 構成比 (%)    | 92.1         | 91.6       | 99.5         | 86.9           | 94.6     | 74.9    |
| 中学校〔187 校〕 | 152          | 171        | 186          | 162            | 173      | 143     |
| 構成比 (%)    | 81.3         | 91.4       | 99.5         | 86.6           | 92.5     | 76.5    |

グラフ 45、46 と表 7 を比べると、学校では探究的な活動に取り組んでいるが、そう受け止めていない児童生徒が相当数いることが分かる。総合的な学習の時間が単に学校行事などをこなすことに充てられているなど、形骸化してしまっている実態が考えられる。

一方、県内には、生徒質問紙において、「総合的な学習の時間に、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいる」と回答した割合が、大変高い学校や増加している学校もある。

例えば、上田市立真田中学校は、本質問に「当てはまる」と回答した生徒の割合が 31.7% である。この中学校では、食育・健康教育を中心テーマとし、学年ごとに活動を進め、指導にあたっては、

考えを発表する時間を確保し、教員が丁寧に指導している。この成果が質問紙の回答に表れていると考えられる。また、大町市立第一中学校は、本質問に「当てはまる」と回答した生徒の割合が、平成26年度に7.1%であったが、平成27年度に21.5%に増加している。キャリア教育を柱に、課題探究のサイクルを意識したカリキュラムを編成し活動の充実を図った成果が表れていると考えられる。（詳細はⅢ3（2））

このように、生徒が総合的な学習の時間に、自分で課題を立て情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組むようになるためには、効果的な取組が実施されている学校の情報を共有する仕組みが必要である。また、探究的な学びについて、小中高を通して共に考える時期であるとの指摘もなされた。小中学校の学びの上に高等学校での学びがあることから、連携した取組を進めたい。

県教育委員会に対する提言

➤ 探究的な学びが一層充実するための支援を進める。

- 📌 総合的な学習の時間における探究的な学びに関する情報を提供する。
- 📌 小中高の情報の共有化を進め、連携した取組についても検討する。
- 📌 地域との結びつきが強い本県のよさを生かし、地域と共に学ぶ体験的な学習を充実する。

3 公立高等学校入学者選抜検査における思考力・判断力・表現力を評価する問題のさらなる充実

高校入試については、昨年度の分析委員会で「考えて書く問題を増やす」という提言が出されている。検査問題の改善がどのように行われたかについては、3月を待つことになるが、県教育委員会では、すでに解答用紙を従来のB4判からA3判に変更し、記述式の問題を増やす方向で進めている。

育むべき資質・能力を評価できるよう高校入試問題の質を高めることにより、小中学校の授業改善が望ましい方向に進む、という視点を重視し、思考力・判断力・表現力を評価する問題が一層充実するような改善を進めることが必要である。

例えば、生徒の思考や表現を束縛する、いわゆる「穴埋め」問題の削減や、理由、ことがら、方法について説明する設問を増やすことが考えられる。これに対応して、説明する設問の解答に対する採点規準を明確にするとともに、義務教育で育むべき学力に関する高等学校教員の理解を促進することが必要であるとの指摘もされた。

県教育委員会に対する提言

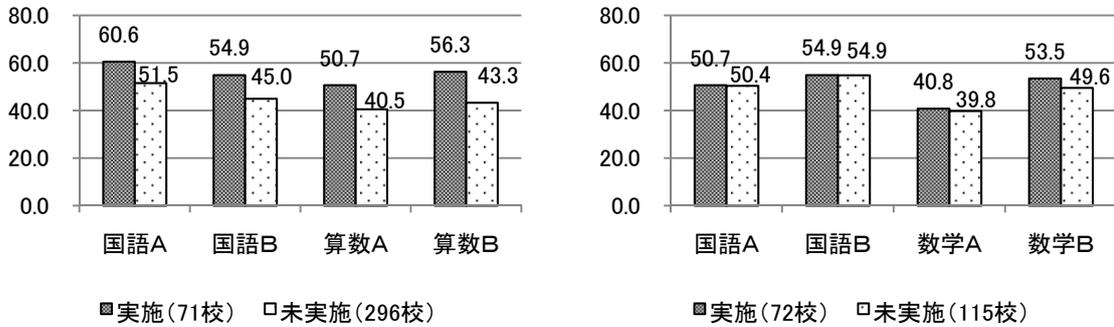
- 公立高等学校入学者選抜検査において、思考力・判断力・表現力を評価する問題を充実する。
- 将来における公立高等学校入学者選抜のあり方について、制度改革も併せて議論する有識者会議の設置を検討する。

#### 4 長野県の潜在的な力を生かした取組の一層の推進：地域との連携、学級づくり

##### (1) 地域との連携による学力向上について

グラフ 47 は、学習支援ボランティア（授業支援、放課後の学習支援、長期休業中の学習支援）を導入している学校の教科調査の正答率の状況を示したものである。

〔グラフ 47〕 学習ボランティア導入の有無と教科調査の正答率の関係  
 (左のグラフ：小学校 右のグラフ：中学校)

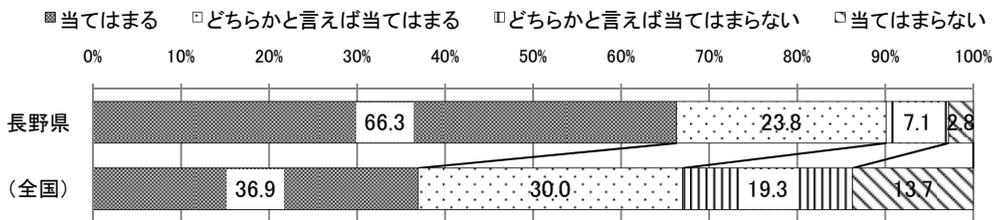


学習支援ボランティアを導入している学校の正答率は、導入していない学校と比べて高い傾向が見られる。この傾向は小学校の方が顕著である。

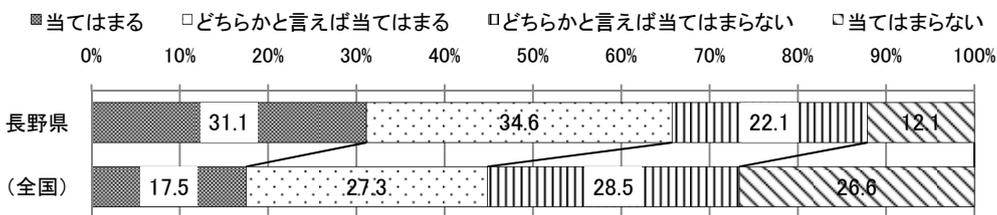
地域に密着し、地域と連携して取組を進めることは、長野県の伝統の一つである。

グラフ 48、49 は、住んでいる地域の行事への児童生徒の参加状況である。「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、全国と比べて大変高い。この割合は全国でもトップクラスであり、本県の児童生徒は、地域と深くかかわって生活していることが分かる。

〔グラフ 48〕 住んでいる地域の行事に参加している（長野県、全国）《小学校》



〔グラフ 49〕 住んでいる地域の行事に参加している（長野県、全国）《中学校》



地域での児童生徒の安全確保に加え、学力向上に関しても、地域と共に進めることが重要であり、学校を地域に開き、地域と連携をして取組を進めたい。例えば、教育課程研究協議会や同好会の研修会に地域や保護者が参加する仕組みなどを整備し、学力に関する情報を共有することもできる。また、匿名性を担保した授業評価・学校評価により、地域や保護者の声を生かすことも大切にしてほしい。なお、地域との連携を進めるに当たっては、市町村教育委員会と共に信州型コミュニティスクール※を生かした取組を進めることも重要になる。

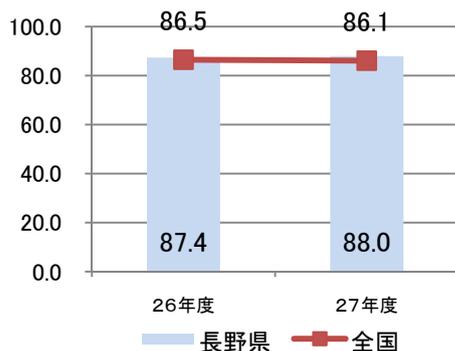
県内の市町村では、学力向上に関して独自の取組を進めるなど、積極的な関わりが進展してきている。本委員会では、取組をさらに進めるに当たって、県教育委員会と市町村教育委員会が「願い」や「思い」を共有していることが重要であり、「これだけは確実にやる」ということの共通理解をもって進めていきたいとの指摘もなされた。

※学校と地域が連携して子どもを育てる取組を土台に、学校と地域が「こんな子どもを育てたい」という願いを共有しながら、新たに地域住民が①学校運営参画②学校支援③学校評価を一体的・持続的に実施していく仕組みをもった地域と共にある学校

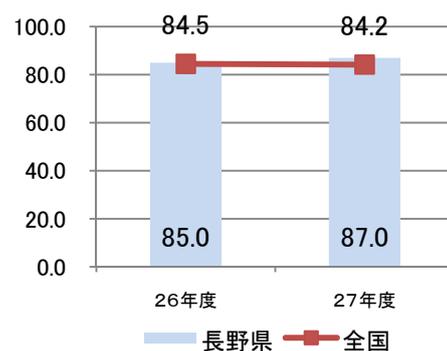
## (2) 学級づくりを中核とした取組について

長野県では、以前から学級づくりを教育の基盤とする教育文化がある。グラフ 50、51 は、学級のみんなで何かやり遂げてうれしかった経験があることの肯定的回答（「当てはまる」、「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた割合）について、平成 26 年度と 27 年度を比較したものである。小中学校ともに全国では「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」の割合がやや減少する中、本県では高い割合を保ちつつ若干増加していることが分かる。

〔グラフ 50〕 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある（小学校）



〔グラフ 51〕 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある（中学校）



学習指導要領の改訂に向けた検討の中で、学び全体を改善する視点として、自らの考えを広げ深める対話的な学びの重要性が指摘されている。学級づくりはこうした学びを成立させるための基盤として大変重要である。学級づくりを中核とした取組は、長野県がこれまで大切にしていたことであり、多くの財産もある。長野県の強みを生かした取組についてさらに充実するよう、県教育委員会は支援を進めたい。

### 県教育委員会に対する提言

➤ 地域との連携や学級づくりなど、長野県の潜在的な力を生かした取組を一層進める。

✚ 信州型コミュニティースクールを生かした取組を進める。

✚ 学級づくりを基盤とした取組が進むよう支援体制を整える。

## V 外部検証委員会からの提言（総括）

### 1 県教育委員会の学力向上に向けた取組に対する提言

#### （1）学カスパイラルアップ事業について

- 各校が全人教育の理念を重視し、エビデンスに基づいた学力向上の取組を進めるよう支援する。
  - ✚ 長野県教育が大切にしてきた全人教育の理念は、これからも重視すべきである。一方、特に学力に関して、全国学力・学習状況調査で得られる教科や生活についてのエビデンスに基づいた学力向上の取組を具体的に進めていくことが求められている。
  - ✚ そのためには、4月に実施した調査の結果を8月末に受け取ってから、授業や学習の改善が始まるのではなく、調査の実施直後に採点を行い、指導の成果と課題を明らかにし、校内で課題とその対策を共有することが必要である。特に、研究授業については、学校行事としてこなすことなく、日々の授業改善にいかに関わり付けるかという視点から全校体制で取り組むことが欠かせない。
  - ✚ 例えば、全国学力・学習状況調査の早期採点、P、C調査、学力向上ミーティングなどを年間でどのように位置付け、改善のサイクルをどのように回すかについてモデルを示したり、全国学力・学習状況調査の分析結果を基に、校内の授業研究を進める組織と学力向上を進める組織が連携した取組が進むように支援したりすることが考えられる。

#### （2）新たな家庭学習モデル創出事業について（家庭学習や補充指導に関して）

- 学習したことの確実な定着を図る家庭学習についての情報発信を一層充実し、各校の取組が進むよう支援する。
  - ✚ 例えば、授業とのつながりが明確な家庭学習の工夫例や、自ら課題を見だし取り組む自立的な家庭学習の取組例などを紹介したり、市町村や中学校区における情報共有の仕組みを整えたりする。
  - ✚ 短い時間を単位として繰り返し教科指導を行う短時間学習（帯学習、モジュール学習）の検討を進めるとともに、放課後や長期休業中の補充指導の取組を進めたい。

#### （3）学力向上にかかわる非常勤講師配置について

- 学校の実態に応じて教員の加配を行うとともに、加配校に対して学校訪問などによる継続的な支援を充実する。
  - ✚ 教員の加配は、学力向上に向けた熱心な取組、特色ある取組、独自の取組などを計画している市町村や学校に対して重点化すべきである。
  - ✚ 学力向上にかかわる加配校については、県の責任として指導主事の学校訪問などを実施し、授業力向上への指導を充実することが大切である。
  - ✚ 教員の加配に際しては、学力向上の基盤となる学級づくりや不登校対応などに対して支援することも検討する必要がある。
  - ✚ 本県では、全国に先駆けて少人数教育を推進してきている。30人規模学級編制や少人数学習集団編制などに必要な教員を配置する信州少人数教育推進事業についても、学力面、生徒指導面など、多面的な検証が必要である。

#### (4) 授業力向上について

- 「授業がもっとよくなる3観点」を生かした授業改善の取組をさらに推進する。
  - 📌 ねらい、めりはり、見とどけの質の向上を図る。例えば、ICTやホワイトボードの活用による協働的な学習の充実、個に応じた補充・発展問題による見とどけの充実などを、具体的に推進する。
  - 📌 効果的な取組事例の紹介を行う。その際、取組とその成果について、生徒の意識の変容についても継続的に捉えることが重要である。
  - 📌 悉皆研修としての教育課程研究協議会を有効に活用し、県内の教員が課題を共有し、解決していく仕組みを作る。
  - 📌 指導主事の学校訪問については、効果的な支援となるよう、方法と内容の両面で検討を進める。

#### (5) 学力向上の取組全体について

- 市町村教育委員会、保護者、地域と学力の状況などの情報を共有し、連携して学力向上の取組を一層進める。
  - 📌 特に、市町村教育委員会と課題を共有し、取組を進める方向を同じにすることが必要である。
  - 📌 基本的な生活習慣の確立や学ぶ意欲の醸成について、保護者や地域と連携した取組を進めることも必要である。

## 2 これからの時代に対応した学習指導にかかわる提言

### (1) 質の高い深い学びの実現について

- 国の動向を注視しつつ、本県がこれまで重視してきた「子どもと共に創る授業」の実現に向けた具体的な支援を進める。
  - 📌 指導法の研究に加え教材研究を充実し、「子どもと共に創る授業」づくりが推進されるよう校内研修を支援する。
  - 📌 「アクティブ・ラーニング」などの新たな学びに関する教員の資質・能力向上のための教員研修を進める。

### (2) 総合的な学習の時間について

- 探究的な学びが一層充実するための支援を進める。
  - 📌 総合的な学習の時間における探究的な学びに関する情報を提供する。
  - 📌 小中高の情報の共有化を進め、連携した取組についても検討する。
  - 📌 地域の結びつきが強い本県のよさを生かし、地域と共に学ぶ体験的な学習を充実する。

### (3) 公立高等学校入学者選抜について

- 公立高等学校入学者選抜検査において、思考力・判断力・表現力を評価する問題を充実する。
- 将来における公立高等学校入学者選抜のあり方について、制度改革も併せて議論する有識者会議の設置を検討する。

### (4) 長野県の潜在的な力を生かした取組について

- 地域との連携や学級づくりなど、長野県の潜在的な力を生かした取組を一層進める。
  - 📌 信州型コミュニティースクールを生かした取組を進める。
  - 📌 学級づくりを基盤とした取組が進むよう支援体制を整える。

## 学力向上外部検証委員会名簿

- 浅輪 佳代子 (県PTA連合会副会長)
- 桂本 久美子 (須坂市立小山小学校 教諭)
- 北村 雅 (白馬村立白馬中学校 校長)
- 木下 まなみ (県PTA連合会前編集委員)
- 齋藤 嘉克 (学校法人 信学会教育振興部 学習企画課長)
- 西 一夫 (信州大学学術研究院教育学系 教授)
- 根橋 悦子 (東御清翔高等学校 教頭)
- 前田 倍成 (石川県教育委員会学校指導課 課長補佐)
- 松木 智子 (東御市立滋野小学校 校長)
- ◎ 宮崎 樹夫 (信州大学学術研究院教育学系 教授)
- 目黒 哲朗 (飯綱町立飯綱中学校 教諭)
- 脇坂 隆夫 (富士見町教育委員会 教育長)

(敬称略・五十音順 ◎委員長 ○副委員長)

# 平成 27 年度 学力向上外部検証委員会報告書 概要版

## I 教科に関する長野県の調査結果（平成 27 年度）

| 公立           | 小学校 |      |      |      |      | 中学校  |      |      |      |      |      |
|--------------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|              | 国語A | 国語B  | 算数A  | 算数B  | 理科   | 国語A  | 国語B  | 数学A  | 数学B  | 理科   |      |
| 平均正答率<br>(%) | 長野県 | 70.4 | 66.4 | 75.0 | 45.4 | 61.3 | 76.2 | 65.0 | 63.5 | 40.6 | 52.8 |
|              | 全国  | 70.0 | 65.4 | 75.2 | 45.0 | 60.8 | 75.8 | 65.8 | 64.4 | 41.6 | 53.0 |

- 小学校では、算数Aが全国平均を僅かに下回ったものの、他の教科・科目は全国平均を上回った。
- 中学校では、国語Aは全国平均を上回り、国語B、数学A、数学B、理科は全国平均を下回ったものの、差はすべて1ポイント以内である。

### 教科に関する長野県の成果と課題

◇：成果 ◆：課題

#### 《小学校》

- ◇国語では、登場人物の気持ちの変化を捉える指導について、一定の成果がみられる。
- ◇算数では、誤りを指摘し、正しい求め方と答えを言葉や数を用いて記述することの指導について、一定の成果がみられる。
- ◆理科では、グラフを考察して分析し、変化とその要因について関連付けて考えることに課題がある。

#### 《中学校》

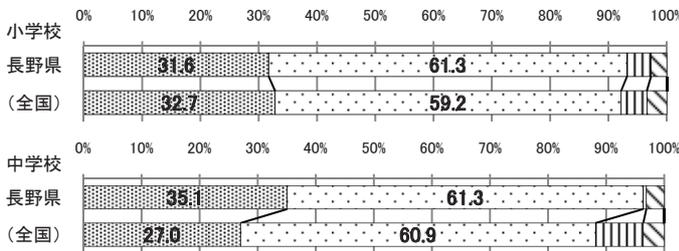
- ◆国語の「単語の類別についての理解」や数学の「二元一次方程式の解を座標とする点の集合が直線になること」の理解など、知識の確実な定着に課題がある。
- ◆国語では、目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出して、それらを基に自分の考えを具体的にまとめることに課題がある。
- ◆数学では、事柄が成り立つ理由を構想を立てて説明することに課題がある。
- ◆理科では、観察・実験の結果を、視点をもって分析して解釈することに課題がある。

## II 平成 26 年度の学力向上施策の評価

### 1 学カスパイラルアップ事業の現状・課題と改善の方向

〔全国学力・学習状況調査の結果を独自の学力調査の結果と併せて分析し、教育指導の改善や指導計画等への反映を行っている 学校質問紙〕

■よく行っている □どちらかといえば行っている ▨ほとんど行っていない S独自の調査を実施していない



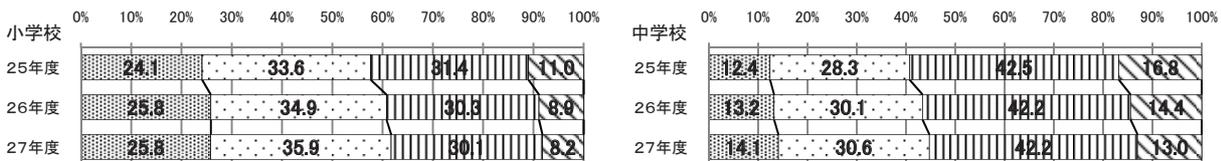
平成 26 年度は、P、C調査に全県の約 85%の学校が参加した。全国学力・学習状況調査の結果を県独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っている割合を示している。「よく行っている」と回答した割合は、小学校では全国平均を若干下回り、中学校では約8ポイント上回っている。中学校では全国と比べて高い割合を示しているものの、本委員会に1名の委員が参加した石川県では、中学校において「よく行っている」と回答した割合は約 60%である。

全国学力・学習状況調査の結果分析を組み込んだ改善サイクルを確立し、計画的・組織的な取組を進めていくことが必要である。

### 2 新たな家庭学習モデル創出事業の現状・課題と改善の方向

〔家で計画を立てて勉強をしている（長野県経年）〕

■ そう思う □ どちらかといえばそう思う ▨ どちらかといえばそう思わない S そう思わない



グラフから経年変化をみると、家で計画を立てて勉強をしていると回答した割合は、小中学校とも平成 25 年から若干ではあるが増加傾向がみられる。家庭学習モデル創出事業が1年目を終えた時点でのものであり、モデル校の取組が全県に広がるまでには至っていないものの、家庭学習の重要性については、学校、家庭、市町村教育委員会それぞれの認識が高まっていると考えられる。

家庭学習の充実に関しては、市町村教育委員会で独自の取組を進めているところが増えてきているが、育むべき学力に向けて的確な成果を上げるためには、県教育委員会と市町村教育委員会が連携し、同じ方向で取組を進めることが重要であるとともに、現場の教員に過度な負担にならないような配慮も必要である。

### 3 学力向上にかかわる非常勤講師配置の取組の現状・課題と改善の方向

非常勤講師が担当する教科や業務は、各学校の課題に応じたものであり、内容は多様である。そのため、必ずしもすぐに教科調査の結果に反映されるとは限らない。取組の成果を測る指標として、児童生徒の意識の変容を、児童生徒質問紙の回答状況から読み取ることができる。

県教育委員会は、加配校の取組の内容や成果を、多くの学校が共有し、自校の取組に生かすことができるような体制を整える必要がある。

本県が全国に先駆けて実施している少人数教育を有効に活用し、加配教員の活用の仕方や効果的な指導法について、さらに工夫することが必要である。具体的には、加配教員を有効に生かすために、指導主事による学校訪問や教員の戦略的な配置を積極的に講じることなどが考えられる。

### 4 「授業がもっとよくなる3観点」を基にした授業力向上の取組の現状・課題と改善の方向

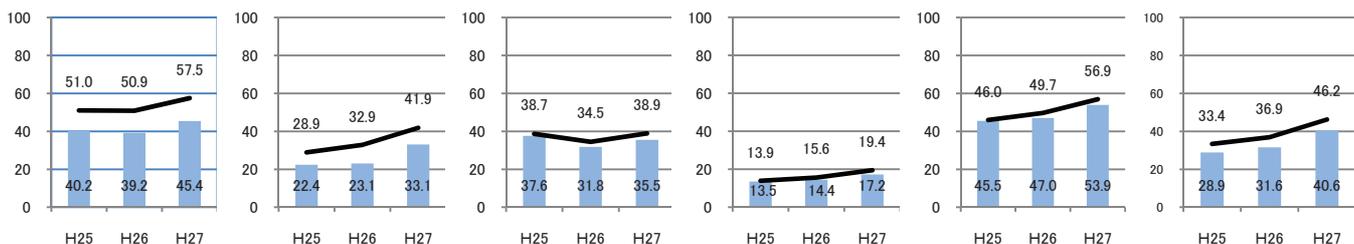
「当てはまる」と回答した割合

長野県  
全国

〔授業のはじめに目標が示されていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）〕

〔授業の最後に振り返る活動が行われていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）〕

〔授業で自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う割合の経年変化（左：小学校 右：中学校）〕



3観点にかかわる質問紙の回答状況は、いずれも全国平均よりも低いものの、増加傾向が見られることから、この取組に関しては一定の成果が上がっているとみることができる。3観点で示されていることは、授業を進める上での観点であり、授業をよりよくしていくためには、ねらい、めりはり、見とどけの質を向上させることが重要である。

「授業がもっとよくなる3観点」の定着は学校現場で進んできているが、さらに推進するためには、県教育委員会、市町村教育委員会が指導の方向を揃えることが必要である。その際、指導主事の学校訪問についても、課題を抱える学校への継続的な訪問、教材研究にかかわる内容の一層の充実など、支援のあり方を検討していくことが重要である。

## III 学力向上外部検証委員会からの提言

### 1 県教育委員会の学力向上に向けた取組に対する提言

#### (1) 学カスパイラルアップ事業について

➤ 各校が全人教育の理念を重視し、エビデンスに基づいた学力向上の取組を進めるよう支援する。

#### (2) 新たな家庭学習モデル創出事業について

➤ 学習したことの確実な定着を図る家庭学習についての情報発信を一層充実し、各校の取組が進むよう支援する。

#### (3) 学力向上にかかわる非常勤講師配置について

➤ 学校の実態に応じて教員の加配を行うとともに、加配校に対して学校訪問などによる継続的な支援を充実する。

#### (4) 授業力向上について

➤ 「授業がもっとよくなる3観点」を生かした授業改善の取組をさらに推進する。

#### (5) 学力向上の取組全体に関して

➤ 市町村教育委員会、保護者、地域と学力の状況などの情報を共有し、連携して学力向上の取組を一層進める。

### 2 これからの時代に対応した学習指導にかかわる提言

#### (1) 質の高い深い学びの実現について

➤ 国の動向を注視しつつ、本県がこれまで重視してきた「子どもと共に創る授業」の実現に向けた具体的な支援を進める。

#### (2) 総合的な学習の時間について

➤ 探究的な学びが一層充実するための支援を進める。

#### (3) 公立高等学校入学者選抜について

➤ 公立高等学校入学者選抜検査において、思考力・判断力・表現力を評価する問題を充実する。

➤ 将来における公立高等学校入学者選抜のあり方について、制度改革も併せて議論する有識者会議の設置を検討する。

#### (4) 長野県の潜在的な力を生かした取組について

➤ 地域との連携や学級づくりなど、長野県の潜在的な力を生かした取組を一層進める。